

沖の空には、鉛色の仏頂面をしたちぎれ雲が五つ、六つ、西に向かつて低く走っていた。朝は風ひとつなく風いでいた瀬戸の海に、昼過ぎから一面に白馬が踊っている。ときどき雨混じりの疾風が、狂ったように庭の立木をなびかせていた。

千代は、生み月に入って大きくせり出した下腹に片手をあて、座敷の雨戸を一尺ばかり繰って、吹きつける雨のしぶきをよけながら外を眺めていた。

面長のきりりとした少年のような顔立ちが、ふつくらと少しむくんでいる。お産のために実家に帰ってからというもの、ろくに化粧もしないためか、顔色が青白い。

突然つむじを巻いた風が吹き抜け、ほこらになつていたヤマモモの木が、ボギツと呻くような音をたてて倒れた。

「千代、いつまでもそんな所に立つとると、お腹が冷えるよ」
いつの間に来たのか、母の紀和が後ろから声をかけた。

「お母はん、うちの人、まさかこんな日に沖に出たりせんと

おもうけど…」

「心配せんでもええ、漁師は天気を読む名人や。かりに朝、沖に出ていても危ないとみれば、お互い誘い合わせて帰ってくるはずや」

紀和は太り気味な体に似合わず、小作りな顔に柔和な微笑みを浮かべながら、そつと千代の肩に手をおいた。

千代は今年の正月に、二十歳で隣村の網元、篠田家の跡取り息子に嫁いでいた。夫の健吉は、若いがなかなかしつかり者で、常に持ち船の一艘に乗り込み、雇の漁師たちの先頭に立って働いている。

網元といっても三、四人乗りの底引き漁船を、二艘もっているに過ぎず、家には一人の女衆も置いていない。夜明けを待ちかねて出漁する舅や夫の世話はむろんのこと、大漁の都度催される漁師の酒宴の準備など、千代は新婚の毎日を夢中で働いた。産み月が近くなり、ひと月ほど前に実家に帰ってからの生活が、まるで違った世界に紛れ込んだような気がしていた。

不思議な疾風であった。昼過ぎにあれほど吹き荒れていた風が、夕方には嘘のように風いだところをみると、豆台風が走り抜けたのかも知れない。

「今晚は、今晚は、飛脚でござんす」

みんなと夕食を食べていた千代は、飛脚と聞いてはつと顔色を変え、箸をおいて母と顔を見合わせた。兄の清太郎が表戸を開けるのを待ちかねたように、手甲きや半に頬かむりの小男が、息を荒げながら入ってきた。

「鳥越村の網元、篠田からの飛脚でござんす。息子の健吉さんが、今日海で亡くなったんや。お葬式は明後日の十一時に決まったんで、知らせに来たんでござんす」

兄のあとを追って後ろで聞いていた千代が、消え入るような悲鳴を上げて、その場にくずおれた。

「これ千代、千代、しつかりせんとあかん。清太郎、千代を奥へ運んでおくれ」

兄に抱き起こされた千代は、突然下腹に鈍い痛みが差し込むのを覚えた。産気づいたのだった。

「千代を早く寝かせて。清太郎、お前は産婆さんに走るんや。千代、赤ん坊が生まれるんや。しつかりせんとあかん」

紀和はかまどの大釜に水を張り、薪に火をつけ、大たらいを部屋に運び込んだ。

幸いお産は初産にしては順調だった。夜明けの満ち潮を待ちかねたように生まれたのは、ふくよかな女の子であった。

夫健吉の命の座と入れ替わるように生まれてきたわが子の顔を眺めながら、千代はいのちの流れの厳しさに思いをはせていた。

篠田家の葬儀には、兄の清太郎一人が参列した。

話によると、その日健吉たちはいつものように、夜明けを待ちかねて小豆島の沖合に出漁した。いつにない不漁にみんな腐っていたところ、昼頃になって急に突風が吹き始めた。それまではなんの前兆もなかったという。

あわてて帰りかけたが、波が高く舵が定まらず、そのうち舵取りが舵棒に振られて海に投げ出された。すぐ浮きを投げたが、荒れがひどく、浮きに近寄れないまま波に吞まれ始めた。

それを見た健吉が、やにわに裸で飛び込み溺れる寸前の男を助けて、船にしがみつかせた。そのとき運悪く、のしかかるような大波にたたき伏せられ、健吉が行方不明になったという。僚船とともに探索を続け、発見して船に引き揚げたときは、すでに息も絶えていたそうである。

千代が婚家に帰ったのは、夫の四十九日の法要が間近に迫ったころであった。それまでは産後の肥立ちが悪く、突然夫を失

ったショックからも抜けきれず、まるで魂を置き忘れたような立ち居振る舞いが、長い間続いたのだった。

隣村とはいえ、鳥越村とりこしむらの家までは村境の山一つ越えねばならず、二里に余る道のりがあった。薄墨色の喪服姿で赤ん坊を抱いて、荷車に乗せられた千代ちよが婚家に近づくと、めざとく見つけた姑のウメが飛び出してきた。

「おお、文恵ふみえが帰ってきた。よう帰ってきた」

赤ん坊は文恵ふみえと名付けて役所に届けられていた。

千代ちよは姑に文恵ふみえを渡し、うつろな表情のままだまって深々と頭をさげたあと、一人で仏間にはいつた。『無量院海徳居士むりょういんかいとくこじ』と書かれた真新しい位牌を眺めながらも、どうしたことか涙もわかなかつた。

「あんたはん、私と文恵ふみえを置いて勝手にさきに行ってしまうて……」

千代ちよは、持っていた珊瑚のじゆずをひぎに置き、そつと懐のロザリオを両手でおさえて、静かに十字を切った。

ロザリオは千代ちよが嫁入りする朝、紀和きわが身につけていたものを、渡されたものだった。

そのとき紀和きわは、

「千代ちよにデウズ様のご加護がありますように。キリシタンだ

ということはおくびにも出したらいかんよ。信仰は心の問題や」

と千代ちよに、くどいほど言い含めてあった。

紀和きわはもともと、敬虔なクリスチャンである。彼女の出里でさとは、小豆島の内海湾うちのみわんに面した半農半漁の村で、一家は昔から隠れキリシタンであった。

時代はさかのぼるが、小豆島はかつてキリシタンの聖地であったことがある。それは安土桃山時代の初期、豊臣秀吉の代官として、小西行長こにしゆきながが小豆島を支配していたときであった。

記録によれば天正十四年（一五八七）の夏、行長ゆきながの要請により浪速の神学校からグレゴリオ・デ・セスペデスが布教に来島したときは、わずか一か月の間に、一四〇〇人以上の島民が洗礼を受けたという。

翌十五年、秀吉が布教を禁止し、続いて江戸時代に入ってからも幕府は、キリシタン信徒の一扫をめざして厳しい弾圧政策を取り続けてきた。

このとき小豆島は、幕府直轄のいわゆる天領であったため、その取り締まりは格別に厳しかったようである。

当時幕府は、キリシタン信者を捕らえると転向を迫り、拒む

ものは磔はりつけにしたり、首だけ出して米俵に詰め、蓑虫のように焼き殺したという。また拷問に耐えかねて転向した者は、転びバテレンと呼ばれ、本人はもとよりその親族まで、厳重な監視のもとに置かれていた。

現に小豆島では、転びバテレンの子、孫、曾孫、玄孫やしやごまで四代にわたって、毎年役人から公儀に動静報告がなされた記録も残っている。

その一方、キリシタンにとって長い冬の時代を、知恵を働かせて乗り切る信者たちがあつたことも事実である。彼らは寺の檀家になりすまし、人前では数珠をまさぐり口に念仏を唱えても、おのれの心の中でデウスを讃えれば、神はその人をお救いくださると固く信じていた。

紀和きわの一家も、このようにして地下に潜りつづけていたキリシタン一家であつた。

紀和きわが十八歳で、本土の五色台ふもとの麓にある坂本家に嫁入りしたときも、キリシタンのことは隠してあつた。紀和きわが夫の寅太とらたにそれを打ち明けたのは、明治六年、政府がキリシタン禁制を解いたときで、紀和きわが嫁入りして数年がたつていた。

ある夜、紀和きわは寅太とらたの前に両手をついて、一部始終を話し、

今まで内緒にしてきたことを詫びた。

「でも、お嫁に來た以上はこの家の習慣に従います。ただ、私の心の信仰だけは変えられません。あなたにご迷惑がかかるようなことは致しませんから、お許しください」

紀和きわは嫁入りの前夜、母からもらつた木玉をつないだ粗末なロザリオを、そつと首からはずした。

寅太とらたは笑いながら、紀和きわの肩をやさしく抱いた。

「物騒なことをする奴じゃ。お父はんやお母はんには内緒にしとけよ。ただし、わしは先祖のお位牌を守らにやらん。バテレンにはなれんから、それだけは心得ておいてくれ」

寅太とらたは家の仏事があるときは、いつもさりげなく紀和きわの信仰をかばい続けてきた。

そんな夫が二年ほど前に亡くなつたが、紀和きわは長男の清太郎せいたろうを喪主に立て、夫の遺志を生かして盛大に仏事を営んだのであつた。

千代ちよが婚家に帰つたその日から、赤ん坊の文恵ふみえには乳女がつけられていた。夫を失つたショックから乳が出ないため、前もつて篠田家しのだけに知らせてあつたので、姑のウメが手配してくれてあつた。

「やや子に乳も呑ませられんようでは、嫁の値打ちも半分じや」

ウメは何かにつけて千代に聞こえよがしに、舅の太兵衛を相手に毒づいた。千代は黙って耐える日がつづいたが、辛抱しきれなくなると文恵を抱いてそつと裏口を出て、波止場に向かうのだった。

夫の健吉はどちらかといえば照れ屋で、人前では千代に優しい声一つかけなかったが、ふつくらとした愛情の持ち主だった。

漁の帰りが早かったときなどは、わざと母のウメの前で、千代に船の掃除を言いつけ、自分もあとを追って波止場にやってくる。

掃除はそこそこにして千代を伝馬船にのせて、近くの無人島にあげり、楽しい語らいのひとときをもってくれた。

いまでも波止場にたたずんでいると、ひよっこり健吉があらわれそうな気がして、ふと振り返ることがある。

健吉の四十九日の法要が終わって、十日ほどたったある日の夜、千代は舅の太兵衛に呼ばれた。奥座敷の仏壇を背にして、赤銅色の顔をこわばらせた太兵衛が神経痛の片足を投げ出してすわり、そばにウメがしたり顔で控えている。

「千代、正直に答えてもらわにやならん。お前はバテレンと

違うか」

千代ははっとして、思わずロザリオをひそませてある懐をかきあわせながら。黙って舅の目を見つめた。

この時代、明治後期とはいえ、幕末まで続いていたキリシタン弾圧はまだ人々の記憶の底に残っていた。ことに田舎では、未だにバテレンは邪教として周りから白い目を向けられ、ましてヤキシタンとの縁組みなど、考えも及ばなかった時代である。

「四十九日の法事のあとのお墓参りのとき、お前が十字を切っているのを、見た者がおる。健吉が死んだ以上、ゆくゆくはわが家の祭祀はお前に頼まにやならんが、お前がバテレンでは仏事が絶えてしまう」

太兵衛の言葉を引き取るように、ウメが意地悪く続けた。

「健吉が死んだのも、お前が仏さんを粗末にしたバチがあつたんかも知れん。嫁のお前が耶蘇では、健吉はお線香一本、お経ひとつあげてもらえん」

ウメの言葉は、千代がそつと胸にしまっていた健吉の思いを、ずたずたに切り裂いてしまった。千代はこれですべてが終わったことを知った。

文恵を連れて実家に帰るほかないと、覚悟を決めた。将来の

生活に不安は残るものの、千代は夫の健吉がいないこの家に、格別の未練は残らなかった。

「お父はん、お母はん、バテレンも先祖を敬うことに変わりはありません。ただ仏様ではなく、天の神様にお祈りを捧げるだけです。でも言い訳はしまへん。文恵を連れて里に帰らせてもらいます」

とたんにウメの顔色が勝ち誇ったように、赤味を帯びた。

「そうはいきまへん。文恵は篠田家の跡取り娘や。あんたの勝手にはなりまへん。」

一瞬、千代は耳を疑った。仏壇の灯明がジジーとかすかな音を立て、大きくゆらいだ。

「そんな：そんな：むごいことを」

泣き崩れる千代を見おろしながら、二人は黙って仏間を出ていった。健吉の白い位牌だけが、いつまでも慟哭する千代の姿をひっそりと見おろしていた。

その夜、千代はまんじりともせずデウス様に祈りを捧げた。なぜ、なぜとの思いは、祈りというより、神への詰問に近かったかもしれない。

「これがデウス様のみ心なら、私は文恵に会うことをきっぱり諦めます。そのかわり、どうかこの子だけは、お守り下さりませ」

千代は憔悴の顔に最後のほぞを固めた。

翌朝、千代はほつれた髪も整えぬまま、朝食中の両親の前に両手をつけて頭を下げた。

「お父はん、お母はん、最後にお願ひがあります。今日一日だけ、文恵と一緒に過ごさせて下さい。明日の朝、お暇させてもらいます」

涙をためた千代の目にじっと見つめられると、さすがの姑のウメもあわてて目をそらせた。

「今日だけは、好きなようにしなされ。そのかわり、これで縁が切れるんや。これからは文恵に会いに来たら、いきまへんで」

舅の太兵衛が、神経痛の足をかばいながらつぶやいた。

「弥一さえしっかりしておれば、こんな酷いことせんで済むのにのう」

死んだ健吉と三つ違いの弟弥一は、十四、五のときから愚れ出して悪い仲間にはいり、近頃は滅多に家に寄りつかなくなった。太兵衛もウメも、今となっては家の跡目を弟の弥一に継がせた

かったが、いまの身持ちでは、かえって家を潰しかねない。

太兵衛は悩んだあげく、いま二つの道を考えていた。このまま弥一の身持ちが定まらなければ、家督は孫の文恵に婿をもらって継がせる。身持ちが良くなれば文恵を嫁にやり、弥一に家を継がせようという思案である。

その日、千代は娘の文恵のそばを片時も離れなかった。何度も根気よく出ない乳房を含ませているうち、昼過ぎになって、乳房にかぶりついていた文恵が突然大きくむせた。乳が出始めたのだった。

千代は流れる涙を拭おうともせず、無心に乳を呑むあどけない顔に、いつまでも見入っていた。昨夜あれほど祈りに祈ってデウス様に立てた誓いが、いま乳房に伝わってくる確かな感触に、一気に押し流されそうな気がした。

ふと文恵が乳房を口に含んだまま、上目づかいに千代の顔をじつと見つめた。そしてつぎの瞬間いきなり、チャツと乳首を噛んだ。

うっ…と、千代は鈍い痛みに呻いた。まだ歯も生えていない文恵の、これが精いっぱい抗議のように思えて、千代はしっかりと文恵を抱きしめた。

(2)

明治三十七年の年の瀬は、日露戦争の真ただ中であつた。

連日のように日本軍の旅順攻撃のニュースが華々しく流れる中で、村で出征兵士の戦士の公報が増え始めていた。

千代が実家に帰ってから七日たつて、嫁入り道具一式が荷車に積まれて、坂本家に送り返されてきた。

たんすを覆っている油単がめくられると、上段の引き戸一面に散りばめられた螺鈿のコスモスの花が、晩秋の日差しに鈍く虹色の光を放っていた。幅一間、三つ重ねのたんすは材こそケヤキだが、前面にウルシがかけられており、木目がはんなりと浮きだしている。

紀和がこれだけはと、分不相応に金をかけて特別に造らせた花だんすである。

「たんすは女子の心のお城や。辛いことや悲しいことがあつても、この中にそつとしまつて辛抱するんやで」

千代に言い聞かせて持たせた品であつた。

その花だんすが、いま千代の憂いを閉じこめたまま、無造作に送り返されてきた。

ものも言わずに荷物を庭先に敷いた藪のうえに下ろして、そのまま立ち帰ろうとする男衆の前に、紀和がすつと立ちふさがつた。

「お待ちなされ。千代の嫁入りのとき、ちゃんとお道具の目録を付けてやってあるはずです。照合して、受け取りを持って帰るのが務めでしょう」

男衆は互いに顔を見合わせて、ささやき合ったが、だれも目録を持っているものがない。面目なさそうに頭を掻く頭領風の男に、紀和は微笑みながら、

「うちには男手が一人しかおりません。荷物は、きちんと部屋まで運び込んでください」

凜とした紀和の言葉に、一も二もなく承知した男衆は、指図に従っていいねいに荷物を部屋に配置し、茶菓の接待をうけて帰っていった。

千代は薄暗い部屋で、放心したようにたんすの前に座り、うつろなまなざしで、散りばめられた螺鈿のコスモスの花を眺めていた。子育てもせずわずか一年を過ごしただけのたんすは、嫁入りのときのまま輝いていた。

このごろふとしたはずみで乳が溢れることがある千代は、胸に入れた手拭いを着物の上からそっと抑えた。

ふと気配に振り返ると、母の紀和が黙って後ろに立っている。とたんに千代は母の腰にしがみつき、堪え性もなく声を上げて泣いた。

離縁になって帰ったときも、青白い顔にかすかに笑みさえ浮かべていた、強情なまでに気の強い千代も、これが我慢の限界だったのかも知れない。

いつまでも、いつまでも、しゃくり上げながら泣き続けた。

「お泣き、お泣き。気のすむまで泣いたらええ。女子とは辛いもんや。やけどデウス様を怨んだらあきません。子供はいつかきつと、デウス様を取り戻してください。明日からは、しんと生きていかんと」

紀和は千代の背中を、やさしく撫で続けていた。

翌日からの千代は、人が変わったように生氣を取り戻していた。と言うより、何もかも忘れようとしていたのかも知れない。身体の弱い兄の清太郎を助けて、がむしやりに野良仕事に励んだ。

もともと坂本家は百姓の家柄である。母の紀和が寅太に嫁いできたときは、わずか四反歩の山の畑と果樹園を、細々と耕して暮らしているに過ぎなかった。それを紀和の才覚で、小作も含めて果樹園を六反歩に増やし、新品種の早生みかんや早生桃を育て、わずか十四、五年のあいだに、村うちでも富裕な農家にのし上がったのである。

むろん家内作業では手に合わず、収穫時には常に人手を雇っていた。

それも、紀和に果樹づくりの才覚があったわけではない。彼女には不思議なスポンサーがついていた。山ひとつ隔てた倉吉村の篤農家の西山青年である。

彼は嫁入りしてきた紀和に、果樹園経営の勘所を熱心に伝授した。長男の清太郎が生まれて間もないころである。

紀和は夫や舅を説いて、みかんをはじめ、びわ、桃、富有柿などを、次々と新種の早生に切り替えはじめた。このため六、七年経つと、果物の出荷がひと月も早まり、市場に出すと三倍から四倍の利益をあげることが出来た。

新品種の接ぎ木も、わざわざ西山がやってきて、紀和に手を取って教えた。むろん穂木も無償で提供してくれた。

紀和は、嫁入りのとき持参した懐剣を夫の寅太に渡して果樹の幹をそがせ、接ぎ木の仕方を又伝えたのである。

西山青年のあまりの熱意を不審に思った寅太が、紀和を問いつめたことがある。紀和は笑いながら、ことのあらましを夫に語った。

それは明治維新前夜の、世の中が騒然としていた時であった。

紀和が本土に嫁入りのため、あらかじめ注文してあったたすや鏡台などを船に積み込もうと、高松の城下町にやってきたところ、その日は官軍が高松城を包圍していたという。

紀和の一行は、たちまち検問所で通行止めに遭い、なかには若い娘をからかう侍もいたという。そのとき同じ検問所で行く人の若者が取り調べを受けていた。

なんでも、切り出し刃の短刀を五、六本所持していたのを見とがめられ、厳しく追及されていた。

「これは果樹の芽接ぎ短刀や」

と、若者はしきりに言い訳をしたが、疑いはなかなか解けなかった。そのとき紀和が物おじもせず、横合いから助け舟を出した。

「あんた、果樹の芽接ぎが出来るのやったら、うちに教えてもらいたいわ。うちはこれから、中島村の果樹農家へお嫁に行く紀和といえます」

若者は黙って、すぐ側の梅の小枝を切り取って、器用に五、六本の穂木をつくり、接ぎ木の要領を紀和に教えてくれた。おかげで疑いは晴れてすぐに放免されたが、そのときの男が篤農園芸家の西山青年だったという。

そんな有り様を、はらはらしながら眺めていた両親や兄た

ちがあきらめて、婚礼を延ばそうと紀和をうながして引き揚げにかかった。そのとき紀和が両親を押し退けて、すいと二、三歩踏みだし、

「お城を攻めるのは、天朝様のご命令ですから致し方ありません。でも天下の往来を塞いで、お嫁入りの邪魔をするのは困ります」

大胆不敵な小娘の抗議に、隊長らしい人が笑いながら、部下を護衛につけて家具屋に案内してくれたという。

そんないきさつで、紀和の果樹園経営は順風満帆の船出であったが、それも夫の寅太や両親が、元気で野良に出ていた間だけだった。数年前に舅、姑が相次いで世を去り、寅太まで後を追うように二年前に亡くなってからは、世帯のやり繰りもだんだん苦しくなっていた。

果樹作りは、ヘカラスの鳴かん日があっても、果樹園に行かん日は無い〜というくらい、管理に手間をかけねばならない。六反歩の山の畑や施肥や耕起、防除に除草、そのうえ剪定や灌水、果実の間引きや収穫の作業は、とても紀和や千代と清太郎だけでは手が廻らない。

しかたなく人を雇うと、収益の大部分が賃金に消えてしまう。かといって手間をばぶくと品質がおちて、市場では二束三文に

買ったたかれる。

市場への出荷にしても、荷車に積んで二里の道を、半日がかりで往復しなければならぬ。これも人手を頼むと賃金がかさむので、収穫の時期がくると、千代は小さな身体に頬かむりといういで立ちで、なりふり構わず兄と荷車を引いた。

夜がきて、くたくたに疲れた体を布団に横たえようと、もう何を考える気力もなかった。ただ深い淵に引きずり込まれるように眠りに落ち、夜明けまで目覚めることがなかった。

かえって、こんな過酷な労働が千代の思考を麻痺させ、悲しみを忘れさせたのかも知れない。

ただ朝の目覚めは辛かった。身体の不ふしの痛みもさることながら、両の乳房が意志を持ったてまりのように、痛いほど張りつめていた。そつと汁わんにしぼって、裏庭の南天の根元に注ぐ日が続いた。

千代の家のすぐ近くの高台に、若宮さんと呼ばれる小さなお宮がある。平安の昔、都からこの地に流されてきた、二条院讚岐という貴婦人の死を悼み、里人たちがここに祭ったという。

お社の境内の桜並木は、夏になると蝉しぐれに包まれる。それを待ちかねたように近所の悪童や、赤子をおぶった子守た

ちが集まってくる。

サクラの幹には目移りするほどたくさん蝉がいて、一匹捕まるとまわりの蝉が一斉に飛び立つ。蝉におしっこを引っかけられた子供たちの、悲鳴や笑い声がにぎやかにこだまする。

千代は子守りたちの背に、そっと娘の文恵の面影を重ねて立っていると、婚家を出るときデウス様に立てた誓いが今更ながら恨めしく、ただ唇をかみしめて、ひとり寂しさに耐えていた。

お社のすぐ裏手には小さな池があり、堤の上に立つと眼下に瀬戸の海が開けている。千代は畑にいく途中、よくここに立ち寄った。

亡くなった夫の健吉の面影が、瀬戸の海の青のたたずまいの中に、息づいているように思えたのである。

吾が袖は汐干に見えぬ沖の石の人こそしらね乾くまもなし

二条院讃岐が詠んだといわれる百人一首の和歌を、千代はそと口ずさみながら、女の生きざまの空しさに、言いしれぬ焦りを覚えるのであった。

(3)

千代が婚家に帰って、はや三年が過ぎようとしていた。その

年の残暑は格別厳しかった。

このところ、毎日のように桃の出荷に追われ、今日も朝の五時には兄の清太郎がひく荷車の後押しをして、千代は町の市場に向かっていた。

千代には近ごろ気にかかることが、ひとつあった。兄の清太郎が、しきりに微熱を出して身体の不調を訴えることである。

「兄はん、帰りはうちが車をひくけん、兄はんは車に乗ったらええ」

「ほんなら代わってもらおうか。わしが後押しをする」

二人がかばい合いながらの帰り道、昼近くになつて村境の上り坂にかかったとき、車の後押しをしていた清太郎が、突然道ばたによろけた。

「あつ、兄はん、どないしたんや」

「大したことはない。ちよつとひと休みしていこ」

清太郎の返事とは裏腹に、青白い顔にはあぶら汗が流れ、道ばたに座って片手をついたまま、苦しそうな息を吐いている。

急な出来事に、千代が兄のそばにかかんで途方にくれているとき、後ろから声がかかった。

「どうした、急病人か。すぐその俺の家で休んだらええ」

男は千代に荷車の梶棒を支えさせ、清太郎を抱えて荷台に乗

せた。清太郎せいたろうと同年輩くらいだが胸幅が厚くみるからにがっしりとした身体で、真っ黒に日焼けした精悍な顔つきをしている。千代ちよに代わって右手で荷車の梶棒を握り、左手は曲げた肘で梶棒を抑えて、さっさと車をひいていく。よく見ると左手首がない。

あらためて男の横顔をしげしげと眺める千代ちよに、

「千代ちよさんやろ、わしを覚えとらんかのう。哲治てっじや、秋元哲治あきもとてっじや」

「あ、哲ちゃんや。うち、気がつかんやった」

哲治てっじは小学校で、千代ちよより二年上だった。家が隣りの集落だったので、学校の帰りなどよく一緒にになった。哲治てっじは身体が頑丈で、学校では餓鬼大将たちの上に立つ大親分格をつとめていた。

千代ちよは身体が小さかったため、よく悪童たちにいじめられたが、いつからか哲治てっじが千代ちよを格別にかばってくれ、悪童たちも千代ちよに手を出すのを遠慮した。おかげで千代ちよは、級友たちに頼られ、そのかばい役までつとめていた。

哲治てっじは川沿いの道に沿って荷車をひき、橋のたもとの小さなわらぶきの自分の家の前に止めた。大きな身体で軽々と清太郎せいたろうを抱き上げ、日陰になった座敷の濡れ縁にそっと寝かせた。

「哲ちゃん、その手どないしたん」

千代ちよがずばりと聞いた。

「ああ、戦争でやられたんや。旅順攻撃の時、砲弾の破片で吹っ飛んだんや。おかげで内地送還になった。それからしばらくして、俺のいた部隊は全滅したそうや」

哲治てっじは丸太ん棒のようになった左手の先を、千代ちよの前に突き出した。

「ああ、こわい。やけど、なにが幸いになるか分からんもんやなあ」

「もう昔のように、土方仕事も出来んようになってしもた。せめて少々資金でもあったら、腕のいい土工を連れて、土木の請負をやってみたかった」

哲治てっじの父も、土方仕事をやっていた。律儀が買われて仕事は結構あったが、日雇いではたかが知れている。

やつと小金をため、哲治てっじと二人で、小さい請負仕事でも思っていた矢先、日露戦争が始まり、哲治てっじが戦地に送られた。負傷して除隊になって帰ってみると、父親は神経痛を患って、寝たり起きたりの生活になっていたという。

「哲ちゃん、その請負とやらいふ仕事は、もうかるんか」
千代ちよはほこりまみれになった草鞋わらじばきの足を気にしながら、

真剣な顔で問いかけた。

「それは、仕事のやりようやが、俺は自信がある。仕事は見積もりと段取りで決まるんや」

哲治の話によると、請負仕事の第一は、その仕事にかかる費用の見積りに優れていないと駄目だという。

第二は仕事の段取りで決まるといふ。いったん人夫を雇うと、たとえ半端な仕事でも一日分の人夫賃を払わねばならない。効率よく働いてもらうためには、仕事の手順をうまく組む、いわゆる段取り一つで、利益が左右されるそうである。

第三は有能な土工を子飼いすることだといふ。

「俺は親父のもとで実地に勉強したけん、土工の見積りと段取りには自信がある。それに餓鬼大将をやってきたけん、人集めはお手のもんや。あとは資金だけや」

人が変わったように熱弁をふるう哲治に、千代はしばらく聞き惚れていた。

そのうち清太郎が、もう大丈夫や、と起きあがったのをしおに千代は丁寧^{ちよ}に礼を言つて家路についた。

その晩千代は、夕飯がすむと早々に自分の小部屋にひきこもった。紀和が心配して部屋をのぞいたが、少し疲れただけや、と答えミカン箱をうつ伏せた小机に向かつて、遅くまでなにや

ら思案していた。

そんなことが四、五日続いたあとである。その日は久しぶりに、朝から雨が降っていた。

「千代、桃の出荷も終わったことやし、今日はお潤い休みや。お団子でも作ろうか」

このごろ、ややもすると考えごとにつける千代に、母紀和が気を引き立てるような明るい声で言った。

「お団子もいいけど、それより私、お母はんに話があるんや。兄はんにも一緒に聞いてもらいたいんや」

千代は袂から折り畳んだ紙切れを一枚取り出して、飯台の上に置いた。清太郎は今日も微熱があるらしく、額に手を置きながらじっと千代を見つめている。

「うちの家このままやと、せっかくの六反の果樹園が荒れてしまう。かというて人を雇うて管理したんでは、採算にあわへん。兄はんもこれ以上無理したら、病気でたおれてしまう。お母はん、私ここで勝負してみたいんや」

千代はなにかに憑かれたように、頬を紅潮させて一気にしゃべった。

千代は子供のころから、ときどき周りをはっとさせるような大胆な発想をすることがある。しかも一旦決心すると、誰に何

を言われようと後に引かなかった。

あれは千代が小学三年生のころであった。田植えや稲刈りの農繁時期になると、いつも非農家の女の友達を五、六人集めて子守の組織をつくり、近所の幼子を預かって小遣い稼ぎをするのである。

「おばちゃん、よかったらやや子と一緒に遊んであげる」

あちこちに宣伝して、幼子たちを近くのお宮さんのお堂に集めて面倒をみる。おやつ代にとくれるお金をためて、親分気取りで配下の友達に配分するのである。

よその子を預かって、怪我でもさせたら取り返しがかんかんと、親が止めさせようとするが、

「お母さんごっこして、一緒に遊んどるだけや」

と、強引に言い張って止めようとはしなかったことがあった。

そんな千代の気性を知り抜いているだけに、紀和は眉をくもらせた。

「千代、お前の焦る気持ち分からんでもないけど、女手で何をしようと言うんや」

「お母はん、わたし土木建設の請け負い仕事を始めようと思うんや。果樹園を売って資本金にするんや。地道にやったら信用もでき、お得意さんも増やせる」

「千代、畑を売ってしもたら、失敗したときどうやって口過ぎする。夢で屁を踏むような、頼りないこと言うたらあかん」

紀和は、千代を厳しくたしなめながらも、心の片隅で或いはこれが転機かも知れないと思った。このまま果樹園を続けても、病弱の長男と女手だけでは、先がみえている。それにしても千代の思いつきは常識を超えていた。

「わたし、このごろデウス様に女の生きざまを試されている。ような気がするのや。それならわたし、とことんやってみる。一家三人がどうにか食べていくだけの生活は嫌や」

それまで黙って側で聞いていた清太郎が、静かに口をはさんだ。

「お母はん、千代の言うのも一理ある。わたしの病気は、医者でさえ原因がわからんという。こんな身体では、ろくに畑仕事も出来へん。このままではずるずる貧乏や。ここはひとつ千代の考えを聞いてみようやないか」

清太郎の一言で、千代の夢のような計画が現実のものとして迎えられることになった。千代はここ数日かけて考えた計画の

あらましを、熱心に説明した。

「いまはまだ頭の中だけの計画や。ほんまにするとすれば、じっくり半年くらいかけて、資金計画や人集め、それに仕事の受注見込みも十分調べんといかん。背水の陣を敷くのはそれからや」

おしろい気ひとつない日焼けした千代の顔には、男のような不転の決意がみなぎっていた。

紀和も女にしては、思い切りのいいほうである。娘のただならぬ決意を読みとると、すぐほぞを固めた。さっそく倉吉村の西山謙吉を訪ねて、果樹園を手放す相談を持ちかけ、その取り引きをすべて彼に委任した。

それからの千代は、体がいくつあっても足りなかった。毎日のように哲治を呼び出して、相談役をさせていた。

「哲ちゃん、請負組が発足したらおまはんは、うちの会社の大番頭はんや。しばらくは給金払えんけど、辛抱してや」

「それはええけど千代さん、肝心なのは建築や。土工は心配ないけど俺は建築には自信がない。初めは土工だけにしところやないか」

千代はいたずらっぽく笑いながら、首を横に振った。

「あかん、請けのいい道路や池の土工仕事は、村のやべち（勤労奉仕）が多いから、請負仕事は貰えんわ。かというて建築の基礎工事ぐらいでは、たかが知れとる。上物の建築を抱き込まんとあかん」

哲治は千代の思いきりのいい構想に、いささか度肝を抜かれていた。千代は土木、建築の工事はむろんのこと、木材をはじめ建築材料一切を、問屋から直接仕入れる計画を立てていた。

そのぶん利益は膨れ上がるが、問題はその資金である。千代は縁故を頼って、近郷近在の頼母子講（たのもしこう）への加入を進めていた。有志が集まって、毎月積み立てた金を入札で借り受ける、いわゆる無尽講で、千代は持ち前の度胸と社交性を發揮して、すでに十口単位で五つの講に入っている。

「建築の方は心配せんでもええ。私がここひと月ほどの間に、目鼻をつけるつもりや」

千代が白羽の矢を立てた大工は、隣の倉吉村の杉山弥兵衛という、今年四十二の厄年を迎えた男である。親方の請負仕事の見積もりや建て前の段取りは、彼一人で切り回していたという。ただ親方が無類の呑兵衛で、近頃は弥兵衛の日当さえ滞りがちになるので、とうとう暇をもらって独立したという。

そこまではよかったのだが、こともあろうに、独立してはじ

めて手がけた仕事に、弥兵衛は大きくつまずいてしまった。請け負った民家の新築工事が、竣工を目前に控えて不審火で焼失したそうである。

原因については世間でいろいろ噂していた。腕利きの弥兵衛に逃げられた親方が、酒に酔って、しょっちゅう弥兵衛の建築現場で焚火をしながら、くだを巻いていたと言う。その失火ではないかというものもいた。

それはともかく、弥兵衛は請負資金の捻出のため抵当に入っていた家屋敷を、一晩で失ってしまった。しかたなく今では日雇い大工をしているという。

千代はこの話を母の紀和から聞かされていたので、かねて弥兵衛を建築の主任にと心積もりしていたのである。

千代から話を聞いて哲治も納得した。

「わかった。あの杉山の棟梁なら信用できる。建て前の段取りも見事なもんや。さすが千代さんや、目のつけ所が違う」
手放して誉める哲治に、千代は面映ゆそうに笑いながらお茶をすすめた。

(4)

千代は請負組の名前を「五色台組」と決め、翌年の二月に発足させることにした。年末には宣伝のため、村内のお宮や薬師堂、稲荷神社などへ、「五色台組奉納」と書いた、清酒と鏡餅を供えてまわった。

宗教については、千代は割り切った考えを持っていた。自分はキリシタンだが、請負組は無宗教ということにしたのである。年が明ると早々に、母家に「五色台組」の看板を張って古い机を三つ据えた。

千代は哲治と弥兵衛の二人を従え、年始をかねて村の農会や役場、郵便局、小学校をはじめ、村の有力者たちの所へ「五色台組」をよろしくと手拭いを配って回った。

「こんど出来た五色台組は、若後家はんのおなご請負やそうな」

「なんでも大工と土工の責任者は、腕利きを入れたらいい」
狭い村内は噂で持ちきりになり、千代が出歩くとたちまち好奇心の的になった。なかには、再婚の邪魔になるからと、千代が乳飲み子を婚家に押しつけて出戻ったらしいなどと、無責任な噂もささやかれた。

「世間の口に戸は立たぬ」と、母の紀和がため息をつくが、千代はさみしくほほえむだけであった。

そんな千代が初仕事として目をつけたのは、村の消防屯所を兼ねた集会の建て替え工事である。二十坪ほどのちいさい平屋建て、千代としては村の公共の建物で、まず実績を作りたかった。

三月のはじめに入札業者の指名をするという話である。松の内が明けると、千代は早速、棟梁の弥兵衛を連れて役場の土木主任の所へ挨拶に出向いた。

ぜひ、ご指名の仲間に加えて下されと頭を下げる千代に、「村の公共工事は、実績もない業者を指名に入れた試しがない。せめて百姓家の二、三軒でも建ててから、挨拶に来なされ」そっけなく言い放ったあと、じろりと棟梁の弥兵衛をにらんだ。

「お前が大工の西山弥兵衛はんか。藤野の親方を見限って飛び出したそうやの。まあ、それはええけど、消防屯署が火事で焼けたら恰好がつかんからもう」

声は穏やかだが痛烈な皮肉であった。そういえば土木主任の青木は、大工の藤野親方の甥であった。さっと気色ばむ弥兵衛を制して、千代はだまって頭を下げて引き下がった。

実績という言葉が重くのしかかり、このところ千代はしきりに焦っていた。いきなり村の公共の施設をと、高望みしたのが無理であった。

かといって民家の建築も、大工を雇って一家総出で手間を提供して建てる家が多い時代である。請負の仕事がどこにでも転がっているわけではない。

そんな中たった一つの頼りは、哲治のもたらす情報だけである。その哲治が、村の郵便局の建築が請負に出されるという、耳寄りな話をもって事務所に顔を出した。三等郵便局だから、入札指名業者の決定は、郵便局長に権限があるという。

郵便局といえば、消防屯署の比ではない。いわば村の看板の一つである。入札の指名にさえ入れてもらえば、必ず落札できる自信があった。儲けなど二の次にして、これを五色台組の実績の看板にしようとして千代は決心した。

局長の家にお百度を踏んでも、指名だけはもらわなければと、千代は焦っていた。

「千代、郵便局の入札の指名を頼みに行くのやったら、ちょっと待ってみなされ。そのまえに、私が局長さんに様子を聞いてみてあげるから」

不審そうな顔をする千代にかまわず、母の紀和がさっさと身

支度をして、昼前に郵便局に出かけた。哲治が心配してご一緒にと願ったが、紀和は笑って取り合わなかった。

昼過に家に帰ってきた紀和は、心配しているみんなを前に、にこにこ笑いながら、

「私がお挨拶だけは済ませてあるから、昼ご飯がすんだら、さつそくお願いに行つたらええ」

それだけ言うと、紀和はさつさと母家に引つ込んでしまった。

千代は小首をかしげながらも、弥兵衛を連れて、さつそく郵便局にかけつけた。この時代、郵便局長といえは村の名士で、見識も高かった。一面識もない千代などが、いきなり面談できる相手ではなかった。

「あんたが紀和さんの娘さんか。器量はええが、お母はんに似合わず色が黒うて、身体が小さいのう」

じろじろ無遠慮に千代に見入る局長に、棟梁の弥兵衛を紹介すると、

「お前さんかい。隣村で請け負った家が火事で焼けたのは」

「左様です。世間様をお騒がせしました。お施主さんに損害はかけられませんので、すべて私の責任で弁償いたしました」

自分の家屋敷を売って始末した話を千代がすると、

「その責任感が気に入った。指名にだけは入れてあげよう」

思いがけない局長の言葉に、千代と弥兵衛は目を潤ませながら、深々と頭を下げた。

「いや、紀和さんに昔、助けられたことがある」

局長の話によると、彼が小学校を卒業してすぐの年だった。

千代の家の柿の木に登って熟し柿を盗ろうとして、枝がバリツと音をたて、局長が落ちかけたところを、たまたま通りかかった紀和が手をすけてくれたという。局長の重荷を受けかねて、倒れた紀和のほうに足をくじいたが、おかげで局長は瘤だけですんだそうである。

「あのとときは命拾いしたわい。その娘さんが、評判のおなご請負師か。これも縁じゃ、まあしつかりやりなされ」

その場で局長は、入札指名業者に渡す金抜き設計書を渡してくれた。

その日、事務所に戻ってから千代は哲治と弥兵衛に、さつそく建築資材の準備を命じた。落札もしないうちに、気が早いにも程がある、と二人が笑うと、

「いいかい。今度の請負で儲けはいらん。大工や人夫の賃金と、私も含めた三人の日当が出たら上等や。まず実績を作るのが先決や。この方針で入札したら、仕事は必ず五色台組が取れ

る」

千代の才覚は冴えていた。ひと月ほどして、隣村の業者もあわせて六社が入札したが、五色台組は他の業者を大きく引き離して、一番札で落札した。ときに明治四十一年の夏で、千代は二十四歳であつた。

その年、香川県では赤痢が流行し始めていた。そんな中で千代をはじめ哲治も弥兵衛も、てんでこ舞いの毎日が続いた。ぎりぎりの予算で請け負つた以上、わずかの手違いがあつても採算はすぐ赤字につながるからだ。

「みんな病気にだけは気を付けておくれ。あんた方に赤痢にでもなられたら、せつかくの五色台組が潰れてしまう」

みんなの健康を気遣いながら、千代の銀行通いが続いた。母の紀和が果樹園を売って作ってくれた資金を、地元の銀行に預けていたが、その信用で融資をしてもらうためだ。

千代は賃金の支払いを、今までのように盆暮れにはしなかつた。兄の清太郎に職人の出面（でづら）を確認してもらい、毎月払いにした。それが評判を呼び、優秀な大工や左官を集めることが出来た。資材も現金仕入れのため格安に入手でき、銀行の貸出し金利を十分カバーすることができた。

順調に天気が続いて、あと十日もすれば、棟上げができると喜んでいたとき、千代は一通の郵便を受け取つた。差し出し人は篠田太兵衛とある。千代が嫁いでいた家の舅である。千代はわけもなく不安におびえながら、急いで封を切つた。

『取り急ぎお知らせします。文恵が十日ほど前に赤痢にかかり、村の避病院に隔離されました。』

私が朝晩様子を見に行き、ときどき泊まって看病もしていますが、日に、日にやせ細り、お医者もさじを投げました。

このままでは、万一のときお前様に恨まれるやも知れず、取り急ぎ一筆したためました。

あらあらかしこ』

それは姑のウメの字であつた。

「お母はん、大変や、ちよつと来て」

千代は手紙をくしゃつと握りつぶし、血相をかえて紀和を呼んだ。

「どないしたんや、千代」

紀和が手紙を奪い取つて、文面に目を走らせた。

「鬼や、鬼婆や。こないなるまで文恵をほつたらかしにして」

千代は机の上の灰皿をつかんで、おもいつきり土間に投げつけた。砕け散る鈍い音は、千代の耳には入らなかつた。

「千代、すぐにこしらえして行くんや。清太郎、替えの草鞋と水筒の準備や。赤痢は看病だけが楽や。母親がしつかりせんとあかん」

興奮して泣き崩れる娘をなだめながら、紀和はてきばきと支度をすすめた。

「千代さん、仕事のことは心配しなさんな。わしが全責任を持つ。すぐ行ってあげなされ」

哲治に励まされ、千代は次第に落ち着きを取り戻した。

「お母はん、あとからオオバコと、ゲンノウシヨウコの陰干しを届けて欲しい。それを煎じる土瓶も一緒に」

オオバコは赤痢に、ゲンノウシヨウコは下痢止めに効くと言われていた。

千代は小さな身体にふるしき包を斜めに背負い、竹の水筒を掲げて小走りに鳥越村をめざした。その後ろ姿を見送ると、紀和はすぐさま近所中を走ってオオバコとゲンノウシヨウコを分けともらった。土瓶といっしょに荷造りして、人を頼んで千代のあとを追わせた。

太陽暦の九月の陽はじりじりと大地を熱し、まだ真夏のよう

に威力を誇っていた。

(5)

千代は峠にかかる山道を、小走りに登っていた。首筋をつたった汗が肌じゅばんをぬらし、着物がぐしよりとまつわりつくのを覚えたが、ひと休みもしなかつた。

ときどき右手を懐にいれ、首に下げたロザリオの十字架をそつと押さえて祈った。

「ああ、デウス様、私のすべてを貴方様に捧げます。文恵の命だけはお守りください。どうか、文恵の命を……」

やがて峠に立つと、はるか彼方の海沿いの低い丘の上に、ポツンと避病院の建物が見えた。千代はカッと目を見開いたまま、水筒の水を一息飲むと、一気に坂道をかけ下った。

避病院を目の前にして、ぶつりと草履の緒が切れたが、千代は片足はだしのまま避病院に駆け込んだ。肩で、はあ、はあ息をしながらも、日に焼けた顔だけはしゃんと前を向き、ぎらついた目で薄暗い奥をにらんだ。

「文恵、篠田の網元の文恵はどこや、お母はんや。文恵、文恵」
看護婦が一人、奥から小走りに出てきた。

「文恵ちゃんのお母はんか、よう来られた。いま目がさめたところや。はよお上がりなされ」

石炭酸せきたんさんのにおいがツーンと鼻をついた。目が馴れてくると、ほの暗い広間の畳に十四、五人の病人が枕を並べているのが見える。千代ちよは上がりかまちの雑巾で足を拭くのもそこそこに、中に進んだ。

奥に近いところに四、五歳の年頃と思える女の子が、三人並んで寝ている。じつと息をこらして三人を眺めた。一人は眠っており、そばに母親らしき女が座っているが、あとの二人はうつろな目をして、千代ちよを見上げている。

真ん中に寝ている子の枕元に、千代ちよはびたりとすわった。母親の直観は鋭かった。生後二か月で別れた娘であったが、おさな顔に亡夫健吉けんきちの面影を見たのかも知れない。

「文恵ふみえ、ごめんよ。こんなになるまで放っておいて。悪いお母はんやのう。寂しかったやろ。もう大丈夫や」

千代ちよは泣きながら、手拭いで文恵ふみえの額の汗を拭ってやった。

「ああ、デウス様、私の命に代えて文恵ふみえをお守りください。アーメン」

首のロザリオをはずして、そっと文恵ふみえの胸の上に置いた千代ちよは、やっと静かに神に祈る余裕ができていた。

文恵ふみえはこんな千代ちよの様子を、不思議そうな顔をして眺めたまま、声一つ出さなかった。熱が高く、やせ細った顔に目が落ちくぼみ、これが育ちざかりの子供のおもぎしかと痛々しかった。

それからの毎日、千代ちよは憑かれたように文恵ふみえの看病に打ち込んだ。朝夕はむろんのこと昼間も二回ほど、熱いタオルで身体中を拭いて、下痢のおむつをしきりに取り替えた。

オオバコとゲンノウシヨウコの煎じ薬を井戸の水で冷やして置き、文恵ふみえがのどの渴きを訴えると、匙さじで根気よく口に運んでやった。

休むときはいつも、文恵ふみえの小さな手を両手でそっと包み込んでやった。四年のあいだ空白のままだった肌のぬくもりを、一気に注ぎ込んでいたのかも知れない。

ある夜、疲れてまどろんでいた千代ちよは、ふと乳房になま暖かい感触を覚えた。そっと目を開いてみると、文恵ふみえがしきりに乳房をまさぐっている。千代ちよと視線があうと恥ずかしそうに、にっと笑った。千代ちよはこみ上げるものを堪えながら、夢中で文恵ふみえをかき抱いていた。

つぎの日、紀和きわが千代ちよの着替えと市松人形を持って、見舞いにやってきた。千代ちよが子供のころ遊んだ人形に、紀和きわが新しく

着物を縫って着せ替えてあつた。

紀和の話によると、郵便局の棟上げも無事おわり、正月明けには村長さんの家を新築にかかる約束が出来たという。

二人が話に夢中になっているかたわらで、文恵は人形をそばに寝かせ、病気の子供に見たてて看病遊びをしている。

「これこれ、おとなしくしてないと、お母はん帰りますよ」

人形をあやす文恵の独りごとに、千代はだまつて目頭をおさえた。

「お母はん、うち文恵が治ったら連れて帰る。篠田の跡とり娘は赤痢で死んだんや。ここにいる子は、私だけの文恵や」

紀和の袂をにぎって興奮する千代の肩を、紀和は軽く二、三度たたいた。

「焦ったらいかん。私が帰りに網元に寄って、太兵衛はんの真意を聞いてみる。すべてデウス様のみ心にお任せするのや」

そんなことがあつてから、文恵はときどきかぼせい声で、「お母はん」と呼んで千代に甘えるようになった。ときにはわがままさえ言うようになったのだが、千代には何より嬉しかった。

だが避病院では一人、また一人と命の灯が消えていく厳しい現実が続いていた。そんななかで一進一退を続けていた文恵の病状が、十日ほどたったころ、奇跡的に好転のきざしが見え始

めた。このあいだに二、三度篠田の家からウメが顔を見せた。

ウメは文恵の介護の面倒を、最後まで見切れなかったことを言い訳がましく、くどくど話したが、千代はかたくなに返事ひとつしようとしなかった。うっかり口を開くと、際限もなく恨みがふきこぼれそうで、怖かつたのである。

このころ篠田家では、弟の弥一の身持ちがまだ治まっていなかった。弥一にしてみれば、兄の子の文恵を、いつまでも大事に家に置くのが気に食わない。弟の自分に跡目を継がせまいとする、父の魂胆のように思えて、家業に身を入れようとしなかった。

一方、父の太兵衛は、孫の文恵を切り札にして、或いは脅かし或いはすかし、次男の性根を変えようと試みていた。あげく、お互いが救いようのない疑心暗鬼にあえいでいた。

文恵の病状が回復にむかいはじめると、千代は食事に十分気配りを払った。腹いっぱい欲しいが文恵をなだめすかし、遊び相手であまく気をそらせて養生につとめた。

そのかいあって、あと二、三日で退院できるところまで漕ぎつけたとき、紀和から人づてに一通の手紙が届いた。

『文惠のこと、篠田の太兵衛さんと約束が出来ました。詳しくは帰ってから話すゆえ、この度は文惠を置いて帰るよう……』千代は約束をはぐらかされた子供のようになり、半ばあきらめながら、肩を落として大きくため息をついた。

不思議なものである。以心伝心というか、その日から文惠が片時も千代を離そうとしない。昼間は足ならしにときどき外で遊ばせるが、

「お母はん、どこへも行ったらあかん」

文惠は、まるで縁日で買ったゴム風船のひもを握るように、どこへ行くにも千代の着物の袖をしっかりつかんで離さなかった。

いよいよ退院の日がきて、篠田家からウメが迎えにやってきた。千代は文惠が泣き叫ぶかと心をいためていたが、その予想は見事にはぐらかされてしまった。

文惠は片手に市松人形を抱いたまま、避病院の入り口で片ひざをつけて見送る千代に向き合った。

「お母はんのあかんたれ」

泣き顔もみせず千代の懐にさっと手を入れ、乳房をギュッとつかんだ。幼い文惠の精いっぱい別の別れであった。

祖母のウメに手を引かれ、海沿いの一本道を振り向きもせず

遠ざかる文惠の姿は、うるんだ千代の目に焦点を結ばせなかった。千代は生々しく痛みが残る乳房を、そっと両手で抑えていた。

(6)

千代はここしばらく眠れない日が続いていた。ひと月にも及ぶ文惠との生活が、生々しくまつわり、長い年月のあいだ無理に眠らせていた娘への感情が、一気に吹き出したのだった。

「お母はん、そんなに簡単に太兵衛はんとの約束が果たせるやろうか」

千代は毎晩のように母の紀和に問いかけていた。

「心配せんでもええ。私が篠田の弥一はんをつかまえて、腹を割って話してみる。弥一はんも馬鹿ではない。太兵衛はんのほんまの気持ちがあつたら、家業に精出すはずや。それが一年続いたら、文惠を帰してくれる約束や」

紀和は日頃おっとりしているが、一旦こうと決めたことは、辛抱強くやりぬく性格であった。

「もう四、五年も辛抱してきたんや。あと一年や二年の辛抱が出来んはずがない」

紀和は近頃少し太り始めた身体を持って余すようにひざをにじらせながら千代を論じた。

その間にも、五色台組の事業は順調に進んでいた。翌年の秋には村長の豪邸新築を完成させ、その冬には村の農業会の建物を請け負っていた。哲治の手広い営業活動と、棟梁の杉山弥兵衛の手堅い仕事が人気を呼んだ結果であった。

もう押しも押されもしない五色台組になり、瞬く間に数年が過ぎた。その間にも世相の移りは目まぐるしく、明治四十四年の大逆事件につき、翌年明治天皇の崩御、乃木將軍夫妻の自決と、暗い事件が続いた。

この年は千代にとっても悲しい年であった。兄の清太郎が亡くなったのである。病弱とはいえ、千代の仕事をかげで支えてくれていた兄の死は、千代から精神的な支えを奪った。

千代はこのごろ、ふっと虚ろな思いが胸をよぎることがある。

へ兄の一生は一体何だったのだろう。あの若い命の灯が、どうして早々に消えねばならなかったのか。あくせく働いて死んでいくだけの人生なら、これほど空しいものはない。

いままで周りの景色ひとつ眺めることもなく、ただ闇くもに突っ走ってきた自分が哀れに思えてならなかった。

千代は祈った。

へデウス様、微かでもいいから、どうか私に希望の光を与えて下さい。希望のためならどんな試練にも耐えて行きます。

篠田家から娘の文恵を取り返す話も、三年ほどまえ姑のウメが中風で倒れてからというもの、一向に進まなかった。数え年十歳になった文恵は太兵衛にとって、ウメの看病になくてはならない存在になっていたのだった。

大正二年、香川県は未曾有の大干ばつに見舞われた。田植えの始まる六月には、ほとんど雨が降らなかった。日照りの続く中、池の水を抜いてどうにか田植えだけは済ませたものの、池はほとんど空っぽになっている。

普通の年なら田植えで減った池の水は、七月の雨で増えるのだが、この年は七月、八月とほとんど雨がなかった。

千代の住む中島村でも、八月になると桑原池の水が底をついた。水掛かりの五十町歩に余る水田は、亀の甲のように一面にひび割れする有り様で、稲は水口の付近を残して次々と黄色く枯れていった。

むろん貯水タンクを持たない山麓の果樹園は、桃もみかんも葉が巻上がり、枯死する果樹が後を断たなかった。ことに昔、千代の家が栽培していた果樹園は、日当たりのいい西向きだっ

たため、その惨状は目を覆うばかりであった。

「千代、いま考えてみると、いい時期に畑を手放したもんや。」

これもデウス様が助けてくれたんや」

このところめつきり白髪が増えた母の紀和が、清太郎を亡くして以来、久々に笑顔を見せた。

「お母はん、今度の干ばつを契機にこの冬、桑原池が嵩上げ工事をするそうや。哲ちゃんが一世代の土木工事やから、ぜひ落札して見せると力を入れてるわ」

桑原池の工事は、堤防を五メートル嵩上げして、貯水量を今までの二倍に増やす工事、土の運搬と突き固めが主な工事である。

日頃、日の当たる建築工事を羨ましく思っていた哲治にとって、土木工事の健在を示す絶好のチャンスに映ったのであろう。哲治の熱の入れようは尋常ではなかった。

「千代さん、いよいよ俺の腕の見せどころや。建築の倍の利益はあげてみせる」

その秋、目論見どおり工事は五色台組が落札した。哲治が、仮設工事として築堤用土のトロッコ運搬を計画して、工事費を抑えたのが功を奏した。

「千代さん、資金繰りを頼みますぜ。人夫は日銭で動くんや。」

この工事が成功したら、五色台組の事務所を二階建てにして、立派な社長室がつくれますぜ」

哲治は白粉気ひとつない千代の、しつとりと落ち着きをみせた顔を、まぶしそうに眺めた。そんな哲治の視線にふれると、千代はふと、哲治の分厚い胸にとけ込みたいような衝動にかられ、顔が赤らむのを覚えるのだった。

「資金繰りは私が引き受けるから、哲ちゃんの思うとおり暴れて見せて」

千代は顔のほてりを軽口にまぎらわせながら、哲治に全権をゆだねた。

総工費八千九百円という大規模な工事であった。当時千円あれば千両普請とあって、豪邸の建築が出来た時代である。しかもほとんどが人夫賃であるから、仕事の段取り一つで大きい利益があげられる。哲治にとっては采配の見せ所でもあった。

工事はその年の十月にかかったが、哲治の意気込みとは裏腹に、天候は皮肉であった。工事を始めるとすぐ、夏の日照りを取り返すかのように、雨の日が続いた。

「土方殺すに刃物はいらぬ。雨の十日もあればよい」と唄われたとおりである。

十一月も十二月も雨が続き、仕事は思ったようにはかどらなかつた。

「千代さん、申し訳ない。せつかくの儲けが雨で溶けだした。千代さんに立派な社長室に納まってもらおうと思うとつたのに」

「心配せんかてええ。社長室に入ったら、哲ちゃんの男前の顔が見えんようになってしまう」

半分冗談めかしていいながらも、千代はこのごろ哲治に寄せらるひそかな想いが、日毎にふくらんでいくのを覚えた。

ため池の工事は、必ず田植えまでに満水させねばならないという、厳しい鉄則がある。そのためには遅くとも三月始めまでに工事を終わらせて、水を貯め始めねばならない。

もう三月も半ばを過ぎており、しきりに水利総代から貯水の開始を迫られていたが、仕事の進み具合からみて、それは無理な注文であった。だが、ここで哲治は一つの勝負を試みた。水を貯め上げながら余水吐の工事を進めることにしたのである。

余水吐というのは、池の水が満水したとき堤防を越えて流れないように、余った水を安全に下流に流す施設である。従って余水吐の工事も終わらぬうちに水を貯め始めるのは、危険な賭

けであった。

幸いここ十日ほどは雨の合間を縫って、堤防の嵩上げ工事が順調に進み、余水吐の工事もあと三、四日で終わろうとしていた。しかし不運は重なるものである。

やっと一息ついた哲治をからかうように、その翌日からまた雨が降り続いた。いわゆる菜種梅雨（なたねづゆ）が始まったのである。

めずらしく大きな雨が四、五日降り続き、雨が止んだあとも山肌から水が流れ出して、二、三日のあいだに貯水はぐんぐん上昇しつづけ、工事中の余水吐に迫ってきた。

このまま水位の上昇が続くと、水は未完成の余水吐を壊し、堤防を洗い流して池が決壊する恐れがあった。

「千代さん、炊き出しを頼む。わしは人夫を指揮して山肌を掘り割って水の逃げ口を作る。夜に入ったら松明をどンドン焚かせてくれ」

その日、夜を徹しての突貫工事が始まった。千代は付近の女衆を集めて、炊き出しを始めた。雨の中の重労働とあって、人夫は一時間毎に二交代制で作業に当たる。だが指揮を取る哲治は休む暇もなく、水は刻々と余水吐に迫っている。

その夜の十一時ごろ、あと一息で逃げ水をかわず掘り割り

出来ようとしたときである。

「あつ、危ない」

大きな声が闇に響いた。ゴーオーと水が唸り、出来たばかりの堀り割りを、水がほとぼしった。

「哲治が流された、哲治——、哲治——」

口々に呼び声が重なる。千代ははだしで小屋の外へ飛び出した。一瞬暗闇であつた。誰かの大きな手が千代の肩をつかんで止めた。

「哲ちゃん、哲ちゃん……」

千代が悲鳴のような声をしぼった。ごうごうと、水の音が闇にこだました。

意識を失った哲治が、堤の下で見つかったのはしばらく経ってからで、すぐ戸板に乗せられて村の診療所に運ばれた。

「哲ちゃん、気がついたかい、ああ、よかつた」

ぼんやりと千代の顔を認めた哲治は

「千代さん……すまん、池の堤防は……堤防は無事やろか」

「心配せんとき、堀り割りが出来たから、もう安心や。ゆっくり休んで、はよ元気になつてもらわんと」

氣息延々の哲治の横で、医師が千代を見ながらかすかに頭を

左右に振った。手を放したのである。

「千代さん……」

つぶやくような声であつた。千代は哲治の手をしっかりと握り、耳を哲治の顔に近づけた。

「千代さん……あんたが好きやつた。もう言うても……勘弁してもらえるやろ思うて」

哲治の頬に涙が光った。

「哲ちゃん……わたしも……ずーっと前から哲ちゃんが好きやつた。どうしてもつとはよ、言うてくれんかつたん」

千代の言葉が聞こえたのか、血の気の去った顔が、かすかに微笑んだ。哲治の涙のほほに、千代は何度もなんどもほほずりを繰り返していた。

(7)

大正三年の五月、桑原池は無事完成した。竣工式の日の朝早く、千代は沈丁花（じんちようげ）を一株と手鋏を持って、池の余水吐を訪れた。哲治が好んだ花であつた。千代はかたわらの山肌を掘って、ていねいにそれを植えた。

いのちが湧きこぼれるような緑を映した水面には、カイツブ

りのつがいがのどかに浮かんでいた。

千代は暗愁に沈みながら、静かに十字をきつた。

「デウス様、人の一生とは何でしょう。デウス様は人に何を望んでおられるのですか。哲ちゃんも働いて働いて天に召されました。私も働き抜いて、やがて天に召されます。あと何が残るのでしょうか」

千代はこのごろ、素朴な疑問にとらわれることが多くなった。すべては神の思し召しだと母の紀和は言うが、千代にはそれが神の気まぐれのようにおもえてならなかった。

生きるとは何だろうと、千代は果てしない模索を続ける毎日がつづいた。

五色台組の営業部門を、一人切り回していた哲治の抜けた空白も大きかったが、それより大きい空洞が千代の胸に広がっていた。

「お母はん、うち、どっち向いて走ったらええのか、方向がわからんようになった。いままで同じところを、ぐるぐる周りにしていたような気がする」

いつになく弱気を吐く千代を、紀和はやんわりたしなめた。

「千代、あんまり走らずに、少しは周りの景色も眺めんといかん。人間は道草も大事なんや」

そんなある日のことである。棟梁の杉山弥兵衛が千代に養子の話を持ち込んできた。

「千代さん、人の寿命は一寸先が分からんもんや。今から五色台組の柱になる者を育てんといかん。わしの弟子に平田壮太という若者がおる」

弥兵衛は、その青年を養子に迎えたかどうかというのである。壮太は今年、二十歳になったばかりである。隣の鳥越村の生まれだが、子供の頃両親に先立たれたため兄弟が離ればなれになり、壮太は弥兵衛の家の、住み込み弟子になったという。

性格が明るく辛抱強く、大工仕事の腕も切れる。それに計数にも明るいという。このごろは兄弟子を差し置いて、弥兵衛に建築見積もり一切任せられていた。

この話があつて以来、千代は建築現場にいくたびにそつと壮太の観察をつづけた。折りにふれ話しかけてみるが、なかなかの好青年である。

ちかごろ鬱々としがちな千代の心に、かすかに光がさしはじめた。千代の考えは欲張ってふくれていった。壮太を養子にし、娘の文恵を取り戻して一緒にさせようと、夢のような考えを持ち始めたのである。

しかし千代の夢はあっけなくはじけ散った。

「せつかくやけど、養子だけはお断りします。俺には平田家を興す夢がある。これだけは捨てきれまへん」

壮太にきっぱりと断られると、どうしようもなかった。

「わかつたわ。もう養子はあきらめます。けど将来、弥兵衛はんのあとを継いで、五色台の専務を引き継いでもらえんやろか」

壮太は一も二もなく喜んだ。千代もこの若者に、重い荷物を半分背負ってもらえると思うとほっとした。それからというものの弥兵衛の了解のもとに、千代は壮太を息子のように目をかけた。

「私がこの世に生きた証は、壮太が引き継いでくれるのや。」

私は、今を生きる証のためにだけ、頑張って仕事を続けたらええのや」

不思議なものである。あれほど人生に疑問をもっていた千代が、ただこれだけのことで、再び生き生きと昔に返って仕事にはげみ始めた。

「壮太、こんど鳥越村へお母はんのお墓参りに行くとき、篠田の網元の文恵にこれ持って行っておくれ」

毎年お盆のほかに二回、父と母の命日に生れ故郷へ墓参りに帰る壮太に、千代が風呂敷包みを手渡した。

「私が縫った文恵の晴れ着と帯や。それにこのコンパクトや。これは文恵の父親が、私にはじめて買ってくれた大事な思い出の品や」

鳥打ち帽子を斜にかぶった壮太は、鳥越村を見おろす峠を越えながら、そっと風呂敷包みに母の匂いをかいでいた。おなじ親無し子とはいえ、文恵が羨ましかった。

ちかくに小祭りでもあるのか、潮かぜにのって笛と太鼓の音が山あいを這いあがってくる。峠を下りるとすぐ、壮太は篠田の家を訪ねて文恵に口上をつけて、品物を手渡した。

「おれ、今からお母はんの墓参りや。手桶貸してもらえんやろか」

途中で手折ってきた野の花を、節くれだった手に握りしめる壮太に、文恵がはじめてはにかむように笑った。

「花も切って持って行ったらええわ。うちも一緒に行く」

文恵は父に似たのか、小学校六年生にしては大柄で大人びて見えた。道みち、壮太はいろいろ文恵に話しかけてみたが、意外に母親への激しい思慕というものが、どこにも感じられない。

「うちは、お母はんに見捨てられた子や。もう辛いことには慣れてしもた」

ぼつりと言って、じっと壮太をみつめた。

「うちは風邪をひいて熱がでたときがいちばん楽しい。うとうとしてると、お母はんがそつと看病にきてくれるんや」

この子もお母はんの温もりだけを、ひそやかに抱きしめて生きているんや、と壮太は思った。

柄杓で墓石に水をそそぎながら、壮太は声をだして語りかけた。

「お母はん、俺も来年は徴兵検査や。当分はお墓参りにも来られんけど、ごめんよ」

秋の日は傾くのが早い。壮太は思い切りよく墓を離れ、手桶を文恵に返した。

「私が、ときどきお参りしてあげる」

あどけない文恵の申し入れに、壮太はすなおに礼をいって別れを告げた。

(8)

世界大戦が引き起こした狂乱景気は、諸物価の上昇をもたらした。ことに米価の暴騰は目に余るものがあった。大戦勃発当時一升二十銭の米が、わずか四年後には五十銭から六十銭にはね上がった。

当然、人々の暮らしは苦しくなった。大正七年の夏には、全国各地で相次いで米騒動がおこり、都会では商店の打ち壊しがあとを断たなかった。

政府はあわてて暴利取締令や穀類収用令を出したが、暴動は一向に治まらず、ついには軍隊の出動をみる県もあった。

紀和はこのころから、ときどき高松の町に出かけることがあった。月に一度くらいだが、米や野菜をしっかりと積みこんだ小車に、自分が座る台座をつくらせ、若い衆にひかせて、西浜漁港の近くの長屋の一軒に立ち寄るのである。

「今日わ、サヨさん、元気かな」

紀和が訪ねたのは鳥越村の網元、篠田太兵衛の息子の弥一の侘び住まいであった。父親との折れ合いが悪く、三年ほど前から家を飛び出して、ここで雇われ漁師をしている。

その間に行きつけの飲み屋の女と世帯を持ち、どうにか口過ぎをしていた。

「まあ、坂本のおばさん、いつもお米をぎょうさんいただきます」

サヨはぼさぼさの髪を小指でかき揚げながら、あわてて内職の袋はりを片付けにかかった。顔立ちは丸顔で可愛いが、化粧一つしていませんのでまるで寝起きの病人のようである。

「そのままだええ、弥一はんは漁に出とるようやが、かえつてその方がええ。例の篠田の綱元を継ぐ話や。いよいよ実行に移そうと思うて」

紀和はかねてから、弥一に懇々と言い聞かせ、おおむね作戦は納得させてあった。紀和が、責任をもって綱元を継がせるからと約束して、紀和の指示どおり動く手はずになっていたのである。

「サヨさん、この前話したこと、いよいよ来月の十日に実行に移すのや。この日の暦は〈先勝〉や。強引に押し掛けたほうの勝ちや」

篠田家ではウメが中風で倒れて、かれこれ八年にもなる。

用足しだけは孫娘の文恵の肩を借りてどうにか済ませるが、家の内の女仕事はなにもできない。

太兵衛も近頃は持病の神経痛に悩まされ、三日に一度は漁を休む有りさまで、今更ながら息子の弥一との不仲を反省していた。紀和は人を使ってその辺の事情を十分調べたうえで、弥一に押し掛け戦術を指南したのである。

「これが成功するかどうかは、サヨさん次第や。しばらくは辛いやるが、お姑はんの面倒を十分に見てあげなされ。あとは私が話しをつけてあげるから」

サヨは根が利口な女であった。紀和の意図を十分にのみこみ、しぶる夫の弥一を励ましてこ一番に賭ける決心を固めていた。

「お婆さん、私たちが綱元に根付くと文恵さんの立場が霞んでしまうけど、ほんまにそれでええのかいな」

「大丈夫や、あんたがた夫婦が太兵衛はんの気に入ってもらうのが先決や。それには文恵を霞ませるのが一番の近道や」

大正七年、第一次世界大戦の收拾もつかぬうちに、政府は突如として「シベリア出兵」を開始した。イギリス、フランスの要請を請け、前年のロシア革命を理由にアメリカと提携して出兵したのである。

この出兵が兵糧米調達 of 思惑をよび、米価をいっそう高騰させ、庶民の生活を苦しめた。世の中の歯車が狂ってしまったような、希望のない毎日が続いた。

そんななか、篠田家にはなんの前触れもなく、息子の弥一が嫁のサヨをつれて帰ってきた。ろくに父親に挨拶もせず、あくる朝からだまって早起きして持ち船に乗り込んだ。

一方、サヨは姑のウメに丁寧にあいさつし、お母はんの面倒は私が看させていただきますと、かいがいしく立ち働いた。

こんな日がひと月も続くと、そこは血のつながった親子であ

る。太兵衛のかたくなな心も次第にほぐれ、なにかにつけて弥一を頼るようになっていた。紀和の作戦はみごとに当たったのである。

紀和は間を置かずに、篠田家に太兵衛を訪ねた。

「太兵衛はん、はよ隠居して弥一はんに跡目を譲りなされ。

このままやと跡取りでもない弥一はんは、すぐ兵隊に取られてシベリアに連れて行かれませえ」

長い白髪を手で梳きながら、やんわりと放った紀和のこの一言が、太兵衛の胸にずしりと利いた。

「紀和はん、ほんまにお世話をかけた。あとは紀和はんの言うとおりにする。文恵はあらためて千代はんにお返ししまひよ」

太兵衛は深々と薄くなった頭を下げた。

さつそくその場に文恵が呼ばれた。

「文恵、お前はおばあちゃんの面倒をよう見てくれた。これからは、お母はんの懐でしつかり甘えたらええ」

太兵衛の目にうつつすらと涙が浮かんでいた。

「太兵衛はん、文恵は改めて迎える者をよこします。そのときは父親の遺骨も、一緒させてもらいます」

穏やかな紀和の言葉であったが、突然太兵衛の表情が変わった。

「それは困る。健吉はわしの息子や、位牌と遺骨はわしが守りをする」

「太兵衛はん、あんたが隠居したら代が替わるのやで。弥一はんはまだしも、その次ぎの代になったら、健吉はんの名前も忘れられてしまうのや」

やんわりとたしなめる紀和の言葉に、太兵衛はまた深々と頭を下げた。

「紀和はん、せめてわしとウメが丈夫な間だけは、健吉の遺骨の守りをさせてくれ。毎日の命日には、文恵をお墓参りによこしてくれ」

二人のやりとりを、文恵は不思議な問答でも聞くように、静かに眺めていた。自分の身の振り方が大きく変わろうとしているのに、どうしたことかその実感も感激も湧かなかった。

「よろしゅうござんす。それでは私はこれで帰りますが、サヨさんを大事にしてやってな。身内もおらん可哀いそうな娘や」

紀和はあっさり引き下がった。ときに文恵十七歳、千代三十四歳、紀和はすでに古希を迎えていた。

「千代、篠田の網元と話しがついたで。さっそく壮太に頼んで、文恵を迎えに行つてもろたらええ」

鳥越村から帰った紀和が、事務所に入るなり千代の肩をぽんと軽く叩いて、吉報をつげた。千代の頭の中を、紀和のとばが他人ごとのように素通りした。

「お母はん、何やて、文恵を戻してもらえろの」

千代は頭の中を整理するのに、しばらく時間がかかった。長い長い歳月だった。近頃はほとんどあきらめに近い心境になっていた。

「文恵が赤痢になったとき、私はデウス様にお願ひした。文恵の命を助けて下されば、すべてをデウス様に捧げますと。これ以上のことを望むのは欲張りかも知れない」

文恵のことを思うたびに、自分を戒めてきた毎日だった。

突然の朗報に、千代はむしろ戸惑っていた。

「長い間、よう辛抱した。話がまとまったのはデウス様のおかげや。千代、感謝を忘れたらあきまへんで」

翌朝さっそく壮太が呼ばれた。壮太は徴兵検査の後、二年の兵役をすませて除隊になったあとは、ずっと千代の家に寝泊まりしていた。女所帯で用心がわるいからと、千代に懇願されたのことだった。

「壮太、すまんが明後日、鳥越村へ文恵を迎えに行つてもらえまいか。ついでと言つてはなんだけど、親のお墓参りもしてきたらええ」

千代はがっしりとした長身の壮太を、見上げるように眺めた。ちかごろ千代には心配なことが一つあった。それは壮太の軍隊召集だった。

政府がシベリア出兵に踏み切つてからというものの、村内でも若者がつぎつぎと召集されていた。壮太のように身内の係累がないものは、一番に狙われても不思議ではない。

千代にはどう説明されても、日本の若者がなぜシベリアまで、戦争に行かねばならないのか、その理由が理解できなかった。お上のやることはおかしいと思つたが、誰に抗議するすべもなかった。

せめて壮太を養子に迎えたら、或いは徴兵を免れるかも知れぬと、千代は何度も考えた。だが家名を興したいという、壮太の固い決心を知っているだけに、その話は切り出せなかった。

その日、文恵を迎えに行くことは、紀和が前もって篠田家へ人を走らせて知らせてあつた。それでも壮太が行つたとき、太兵衛は一人でおろおろしていた。

「文恵、もう行つてしまふんなあ。お前が大きくなるのが、

わしとウメの生きがいやった。せめてお父はんの命日には、お参りに帰ってこいよ」

祖母のウメも嫁のサヨに助けられながら、よろよると上がりかまちまで出てきた。

「文恵、長い間わたしの世話をようしてくれた。ありがと。乳飲み子を母親から引き離してしても、お前に辛い目をさせたけど、堪忍やで。お母はんにしつかり可愛いがっでもらうんやで」

ウメの涙声を聞くと、文恵はそれまで胸にたまっていた思いを一気に吐きだした。

「おばば、今さらどうして、うちが坂本の家に行かにならんの。うちはもう子供やない。お母はんなんか要らん。うちの気持ちも聞かずに、勝手にまわりが決めてしもて」

文恵の言葉は太兵衛の胸をきりきりと刺した。あの当時、長男健吉の不慮の死に動転していたとはいえ、孫娘の幸せを差し置いて家名の存続だけを考えていた自分を恥じた。

バテレンを理由に文恵の母を追ったが、それはなかば口実にすぎなかった。それは母と子を裂く理由にはならない、むごい仕打ちであった。

なによりも、最愛の孫娘に母親を慕う感情を失わせてしまっ

たことが、太兵衛には辛かった。

「文恵、お前のお母はんは十七年間、泣きの涙で暮らしてきたんや。だまって、お母はんのところへ帰ってあげておくれ」
太兵衛は目頭を押さえながら横を向いた。

そんな祖父の姿を見ると、文恵は素直にうなずいた。

「おじじも、おばばも、身体に気いつけてなあ。うち、ときどき帰ってくるから」

荷物といつても、柳ごおり一つと風呂敷包みだけであった。

壮太がひよいとそれを小車に乗せた。

「それじゃ、僕が連れてかえります。いろいろお世話になりました」

「うち、お父はんのお墓にお参りしていく。壮太さんの家のお墓にも、昨日お花あげてあるから」

文恵は遠ざかるわが家を、ときどき振り返りながら、マンジュシヤゲの咲く野道を壮太の曳く小車のあとについて歩いた。

壮太の父母の墓の周りにはきれいに草が抜かれ、花筒には小菊とコスモスが活けられていた。

「文恵ちゃん、いつもきれいにしてもろて、ありがとう」
壮太は墓前につくなんて両手をあわせた。

「お父はん、お母はん、おれもいつ召集がくるかわからん。

今度召集されたらシベリヤや。そのうち俺が家を持ったら、お墓を近くへ移すから待っててや」

墓に語りかける壮太を見ながら、文恵は思わずつぶやいた。

「壮太さんは親が死んだから、自由に羽ばたけるのや。うちはお母はんが遠い所で生きとるから、ややこしいことになるんや」 それを聞いたとき、壮太ははっとした。母親と娘を隔てた、十七年の歳月の谷間の深さに目がくらむ思いがした。

その日、千代は朝から自分でも首をかしげるようなことばかりしていた。わけもなく鶏小屋の戸を開けてみたり、用もないのに納屋の種芋をのぞいてみたり、はっと気がつくたびに自分でおかしそうに笑っていた。

十数年ぶりで会う文恵の成人した姿を描いてみても、なにがしっくりしなかった。頭では娘の成人した姿を受け入れながらも、千代の心のひだの奥深くひそんでいる文恵の姿と、どうしても解け合おうとしない。

婚家を去るとき母をじっと見つめながら、チャツと乳首をかんだあどけない顔と、避病院での別れ際に、いきなり乳房をぎゅつとつかまれた、せいっぱいの抗議の顔だけが交互に浮かんでくる。

千代の中の文恵の成長は、そこでぴたりと止まっていたのか

も知れない。千代にとって十七年のへだたりは、悲しいほどに遠かった。

誰に訴えたところで、わかってももらえるものでもないと思いつながら、母の紀和には何も告げずに、足は自然に若宮の社に向かっていた。

鳥居をくぐると境内のサクラもみじが、はらりはらりと、音もなく散りかかる。広場を横切ってお社の裏にまわり、宮池の堤に立つと、瀬戸の海の青が冷やりと目にしみる。

赤とんぼが群れをなして池の水面をかすめ、群れから離れた一匹が、ゆる木に止まってじっと羽根をふるわせていた。

吾が袖は汐干に見えぬ沖の石の人こそしらね乾くまもなし
二条院讃岐が詠んだ歌さえ、今日はなぜかもどかしく、いらだちさえ覚えるのであった。

「ただ今戻りました」

西の空に、ひときわ鮮やかに朱色が滲みはじめたころ、壮太の元気な声が響いた。

「ああ、ご苦労さん。疲れたやろ、さあ文恵も壮太も早く上がりや」

紀和が茶の間から小走りにでてきて、二人をうながした。紀和

の後ろから千代が無言のまま、そつと顔をのぞかせた。

千代が縫って送った銘仙の着物姿で、小さな風呂敷包みを小脇に抱えた文恵は、母に似ずすらりとした背丈である。面差しも父親似か、どこかおっとりとしたところが見られた。

長かった空白を確かめるように、千代はしばらくはじつと文恵を見つめたままであった。奥の暗さに目慣れた文恵も、母の姿に無言のまま目を凝らした。紀和がそつと座をかわし、壮太も外へ出た。

二人の視線がお互いをさぐり合うように、静かにからみ、やがてまた静かに解かれた。

それは気まずさというでもなく、面映ゆさというでもなく、ただ歳月の谷間をそつとのぞき見るような視線であった。

「お母はん、〈文恵〉という言葉は、すぐにはどちらからも出なかった。

「さあ、早くおあがり。積もる話はあとからや。壮太をよんでおいで」

やつと千代の口から出た言葉はこれだけで、文恵も無表情のまま、こつくりうなずいた。

四人で囲んだ祝いの膳でも、母娘は言葉少なに、どちらかといえれば気づまりさえただよう夕食であった。

その晩、一人になってから、千代は言いようのない空しさを、じつとかみしめていた。千代が一人で耐えてきた間に、歳月は娘をすくすくと育み、いまさら母親が手を差しのべることは何もなかった。

かいこは、自分の手で立派な繭を作り、その中に閉じこもっていたのだ。そんな繭をわざわざ遠くから運んできて、鋭い刃物で切り裂いてサナギを取り出してしまったのである。

繭を切り裂いた千代も、繭からむりやり取りだされたサナギも、お互い困惑以外のなにものでもなかった。

血の濃さに頼って夢を持ちつづけ、繭のままそつと見守ってやるのが出来なかった母のおろかさが、むしろ哀れであった。

紀和は近ごろ足腰が目に見えて弱り、杖をはなせなかった。文恵が帰ってからは千代からも「おばあちゃん」と呼ばれ、外出のときはいつも文恵が付き添っていた。

この年の春、二十五歳の壮太に召集令状がきた。しかも、入隊した丸亀歩兵十二連隊にシベリヤ出兵の命が下り、千代が恐れていたとおり、壮太はシベリヤの野に狩り出されていった。

「ロシヤが、日本になにか悪い事をしたのかい。なんで日本

の若者が、シベリヤで命をさらさんといかんのやろ」

千代の素朴な疑問に答えられるものはいなかった。

「デウス様、どうか壮太をお守りください。五体満足で帰還できますように。私は一生、茶断ちをいたします。どうか壮太を無事でお返しください。アーメン」

このごろ毎晩のように、夕食前にお祈りをする母のつぶやきを聞いた文恵が、不思議そうな顔でじっと千代を見つめた。

「お母はん、壮太さんはお母はんにとって、そない大事なお人やったの」

「壮太は私の息子や。この五色台組も壮太に継いでもらうつもりや。無事に帰ってもらわんと困る」

千代の胸には、かつて土木担当の秋山哲治が、戦傷で失った左手首を千代の前に突き出して見せたときの様子が、鮮明に残っていた。

「私の命に代えても、と祈りたい気持ちやが、それは昔一度お祈りしてしまっている。デウス様に二番抵当はお出しできません、茶断ちでご勘弁願うのや」

側で聞いていた紀和が、びんの白髪をなでつけながら、だまって二度、三度大きくうなずいた。

大正十一年、日本政府はついにシベリヤ派遣軍の撤兵を宣言

した。シベリヤの野に三千人をこえる若い命と、十億円という巨額の戦費をつぎ込んだが、得るところはなにもなかった。

やがて丸亀の軍隊も六月に帰還することになり、出征兵士の家庭は喜びに湧いた。

「文恵、いっぺん篠田のおばあちゃんの見舞いに行ってもらえんやろか。お供に小坊主を一人つけてやるから、壮太の両親のお墓も掃除してやっておくれ」

日ごろ母の千代とは、なにかにつけて遠慮もあり、あまり溶け込めなかった文恵であったが、千代に言われて二つ返事で承知した。やがて壮太が帰ってくるというのが嬉しかった。千代が、壮太を格別に大事に思っていることも嬉しかった。

「お母はん、うち一晚泊まってきたもええか」

「ええとも。一晚といわず、二晩でも三晩でもゆつくりしてきたらええ。お土産はお母はんがちゃんと揃えてあげるから」
その晩文恵が何時になくはしやぐ姿をみて、千代はそつと唇をかんでいた。母と娘を隔てた十数年の歳月は、いまさら取り返しようもないことが、千代にはわびしかった。

鳥越村とりこしむらの篠田家しのだけでは文恵ふみえの泊まり掛けの来訪に、祖母のウメが涙を流して喜んだ。昨年せんねんの九月、父健吉けんきちの命日の墓参り以来であった。

今年古希を迎えたウメは、中風の病状がますます進み、ほとんど寝たきりの生活でことのほか気弱になっていた。弥一やいちの嫁のサヨが姑の面倒を見ながら、網元の家事一切をかいがいしく切り回している。

「文恵ふみえ、おばあちゃんのそばに付いてあげておくれ。ちかごろ口癖のように、文恵ふみえのことばかり口にしている」

そういう太兵衛も、神経痛の足を引きひき鈍い動きに変わっている。

そんな中で、文恵ふみえは一抹の寂しさをどうすることも出来なかった。ここ二、三年、生家を訪れるたびに自分の納まる場所が狭められ、立場が霞んでいることに気付いていた。

生家は文恵ふみえにとって、思い出の家になりつつあった。もはやここは自分を迎えてくれる家ではないことも悟った。

三日目の昼前である。ひよつこりと壮太が篠田家しのだけに姿を見せた。

「五色台組の壮太です。文恵ふみえさんをお迎えに参りました」
軍服姿で挙手の礼をして、日焼けした精悍な顔をほころばせ

た。

「まあ……壮太さん、お帰りなさい」

祖母の心細そうな顔をみていると、帰りを告げかねていた文恵ふみえも、これをしおに思いきって別れを告げた。

もう真夏の空であった。例によって墓参りを済ませた二人は、黙って寄り添って歩いた。

「この先の岬に行ってみようか。おれ千代ちよさんに、昼弁当を二人分作ってもらったんや」

「わあ、うれしい。日が傾くまで休んでから帰ると、暑さがしのげるわ」

岬に下りる細道は、きつい下り坂だった。ともすれば滑りそうになる文恵ふみえを、後ろから壮太がしっかりと支えていた。最後の二尺ほどの崖は壮太が先に飛び降りて、文恵ふみえを抱き抱えて降ろした。上気した文恵ふみえの頬を目の前に、壮太は思わず固唾をのんだ。

白い砂浜に降り立った文恵ふみえは、はだしになって着物のすそをつまんだまま、波を追って海に走った。一転して返す波にきびすを返して楽しい悲鳴をあげながら陸に逃げ帰る。

壮太もにこにこ笑いながら、なぎさに近づいて「それ、逃げろ」と声をあげる。

壮太はふと思った。こんな平和な笑い声は何年ぶりであろうか。シベリヤの荒野は、人の笑いも凍らせるかのように、吹雪が吹き荒れていた。いったい何を求めて戦ってきたのだろう。多くの戦友たちが次々と倒れていった。末期の水も凍ったままで、飲ませてやれなかった。

へここは別天地だ。ここには、はち切れそうな青春がある。おれは生きて帰ったんだ」

文恵の無邪気な笑顔が、壮太にはまぶしかった。それは青春そのものに見えた。それは壮太の青春でもあった。

「きやーつ」

ひとときわ艶のある悲鳴をあげて、大きな返し波に戯れながら、文恵が走ってきた。壮太は両手を一杯にひろげて、がっしりと文恵を受けとめた。

つぎの瞬間、軽々と文恵を抱き上げて、草原に運んだ。海風がひらひらと文恵の裾をひるがえした。

草いきれに酔いながら、確かめ合うように二人は何度もなんども口づけを繰り返した。若い二人には、空もなかった。海も波もなかった。砂浜もなかった。

何も考えなかった。いま何がおきているのかも、わからなかった。二人は獣のように燃えて、ただひたすらに求め合った。

快いけだるさのなかで、ふとやわ肌をなぶる潮風に気付いた文恵は、壮太の首に回していた両手をそっと解いた。さすが日の長い夏至の太陽も、瀬戸の海に傾きはじめていた。

壮太と文恵が「ただいま」と、家に入るなり、待ちかねたように母の千代が走り出てきた。

「お婆あちゃん倒れたんや、さっきお医者さんが帰ったばかりや。急に胸が苦しうなったらしいのやが、今は落ち着いてものも言える」

千代は心細さから逃げるように、一気にしゃべると、ぺたりとその場に座った。二人は足早に奥の居間に入った。

「おお、お帰り、大した事はない。そうびっくりせんでもええ」

紀和は二人を見ながら、弱々しいが落ち着いた声で話しかけてきた。

「ああ、びっくりした。帰るなりお母はんがまくし立てるものやから」

薄暗い電灯の下で、血の気を失った紀和の顔色が青白く浮いてみえる。

「文恵、お前のお母はんもお前も、ほんと、お芝居のような人生やな。けどそれは、お前だけやない。人生いうもんは、お

芝居の舞台と一緒にや。幕が開いている限り、みんな一生懸命に演技を続けなならん。その振り付けをするのは、(へのちの流れ)や。流れに逆ろうたらあきまへんで」

そこまでしゃべると、紀和は大きく息をはいて間をおいた。

「私のお芝居の舞台もやがて幕が引かれるけど、悲しむことはありまへんえ」

文恵の目をじっと見ながらここまで語ると、紀和は大きく二、三度息をした。

心配そうにのぞき込む壮太の顔に、紀和は弱々しく微笑んだ。

「心配ない。それより二人ともお聞き。私もお母はんも、自分の進む道はデウス様にお任せしてきたのや。人間というものは弱いもんや。あんたたちもデウス様のこと、一度ゆっくり考えてみなされ。

それから壮太、お前は千代の相談役を引き受けておくれ。千代は走り出すと、周りの景色が目に入らんようになる人や。壮太が上手に道草をさせてやっておくれ」

一気にここまでしゃべると、さすがに疲れたのか、少し眠るからといって目を閉じた。

その夜明け、紀和が息を引き取ったのを、そばに寝ていた娘の千代さえも気付かなかった。まるで眠りの続きのような、お

だやかな最後であった。

紀和の葬儀は翌日、高松の教会からやってきた牧師と、信者の人々の手で、厳粛に営まれた。中島村では、キリシタンの葬儀は初めてとあって、人々に好奇の目をみはらせた。千代は喪主として喪服の胸に十字架を下げたが、文恵はとまどっていた。千代は何も言わなかったが、壮太と相談して数珠は持たずに母の後ろに従った。とまどったのは文恵だけではなかった。近所の人たちも異様な雰囲気には当惑しながら、野辺の送りの供に連なった。

紀和の骨揚げが終わった日の夜、千代は棟梁の杉山弥兵衛を夕食に招いた。むろん壮太も文恵も食卓に連なった。弥兵衛も壮太も飲める口である。千代も少々ならお付き合いができる。

文恵の酌でほどよく回ったところで、千代が改まって口を開いた。

「棟梁、このあたりで私は表舞台から降りようと思うのや。私は社長を引退して、会長にならせてもらおう」

突然の千代の言葉に、弥兵衛も壮太もびっくりした。

「私の後は、前々から話していたとおり、壮太に社長をやってもらおう。少々若すぎるかも知れんけど、壮太ももう二十七や。どうか棟梁が盛り立ててやってください」

千代が座布団からすべって、両手をついて弥兵衛に頭を下げた。

びっくりしたのは壮太のほうである。

「それは千代さん、俺にはまだ早い。あと五、六年は勉強せんと社長はつとまらん」

壮太は酒にむせながら、手を左右に振った。

「壮太、これには条件があるのや。他でもない。娘の文恵を幸せにしてくれる、嫁ぎ先を壮太が探してやって欲しいのや。

文恵は嫁に出すつもりや」

驚いた文恵が、すぐるような目を壮太に向けた。

「それも期限がある。お盆までに文恵が気に入るお婿

さんを、見つけてもらわにやなりまへん。それくらい

が出来んようやったら、社長は杉山の棟梁にやっても

らう」

「これは面白い。壮太も男の子じゃ。ここはひとふんばり、せにやなるまい。それともしつぽを巻いて、社長をわしに譲る

かい」

弥兵衛が手酌をしながら、千代と顔を見合わせて大笑いした。

しらせ顔の文恵が、突然顔を赤くしてうつむいた。母の難題の意味が解けたのである。そんな文恵を見て、壮太も千代のか

けた謎がやつとわかった。

「文恵さんの婿さんは、もう見つけてあります。その男は必ず、文恵さんを幸せにします」

壮太は顔に吹き出る汗を片手でぬぐいながら、身体を固くして、千代の目をまっすぐに見た。

「さすが壮太や。千代さん、いや会長、今日はおめでたい日や。今からは祝い酒や。花嫁さん、お酒のかんを頼みますぜ」
紀和の葬儀明けの日だというのに、ご機嫌の棟梁が渋いので唄う花笠音頭が、座敷から流れはじめた。

その年の秋、坂本家の離れに文恵の嫁入り道具一式が運び込まれた。特別にぜいを凝らしたという品ではないが、たんすだけはひとときわ目立っていた。

幅四尺、三段重ねのたんすの表の材は桜で、うるしをかけた木目がしつとりと浮かんでいる樹齢百年を超える、山桜の巨木が使われたという。

上段の引き戸には、螺鈿（らでん）のサクラが配置よく散りばめてある。

「わあ、きれい、サクラの花だんすや。うち、傷をつけんように大事に使います」

虹色に輝く貝細工のサクラの花びらを、文恵はそつと指でなぞつた。

「文恵、たんすは女子（おなご）のお城や。子育てという戦争をして傷だらけになってこそ、値打ちがあるのや。私は子育てが出来んかったから、未だに傷一つついておらん。毎日、無傷のたんすを眺めて暮らすのが、お母はんにはどれほど辛かったことか」

文恵はたんすを眺めながら、千代の言葉をだまって聞いていた。

「それはお母はんの勝手や」

危うく文恵は口に出しそうになった。

「お母はんは篠田の家で、デウス様を捨てるか私を捨てるか迫られた。せっぱつまって、お母はんはデウス様をとって乳飲み子の私を捨てたんや。いまさらそんな勝手なことを」

文恵は口を一文字にひきしめ、胸の奥深くで反発した。物心ついて以来、文恵は篠田の祖母にそう教えられてきた。

「へどつちを取るか、お母はんは自分で選べたけど、赤子の私には選ぶことが出来んかった。信心に生きたお母はんは、それでよかつたかも知れん。捨てられた私がどんな思いで育つたか、お母はんにはわからんのか」

小学校に上がってからも、両親がいない子は文恵だけであった。運動会や父兄会があつても、祖母にしか来てもらえなかつた。

「どうしてうちには、お母はんがおらんのか」

近所の悪たれに親無し子といじめられるたびに、泣きながら何度、祖母のウメにしがみついたことか。

この家に迎えられてからも、お母はんは勝手に気ままな女や」といふ思いが、いつもどろろと胸の底に沈んでいた。

「文恵はこれから長い人生を歩くのか。辛いことや悲しいことも、そつとたんすにしまつて、サクラの花のように明るく生きていくんやで」

千代はふと無表情なままの文恵に気づき、寂しく口をつぐんだ。一瞬、せつない思いが千代の胸をじわりと締めつけた。

「私には、文恵の胸にとどくような言葉をかけてやることは、もう出来んのかも知れん。ましてや、無傷のたんすを眺める母の切なさなど、どう説明したところで、分かつてもらえるものもあるまい」

たんすの引き出しを一つ一つ引いて、開き具合をたしかめる文恵をおいて、千代はそつと座を立った。

その日、五色台組の事務所では、粗末な机の前で社長の壮太が頭を抱えていた。どう首をひねっても納得がいかなかった。

「壮太、一体これはどうしたことや。社長になって初仕事やいうのに」

そばから千代ちよが齒がゆそうな声を出した。

「いや、会長、こればかりは社長を責めてもはじまりまへん。

藤野組が、どうしてうちより二割も安く落札したのか、私もそれが不思議なくらいや」

棟梁の杉山弥兵衛やへえが首を傾げながら、壮太を弁解した。

それは中島村の尋常高等小学校の、校舎の建築工事であった。

競争入札で指名に入ったのは、村の藤野組、桑原土建、五色台組の三社と、隣村の建築業者二社の計五社である。

間口六十四間、奥行き五間、三百二十坪の校舎の新築と、旧校舎の移築一棟、それに運動場拡張の地均し工事一式で、村では近来にない大工事である。

シベリヤ出兵につづく、大正十二年九月の関東大震災は、昭和に入ってから日本経済を極度に沈滞させていた。こんな不景気のなかで発注された学校建築は、まさに地元の建築業界

の垂涎すいぜんの的といつてよかつた。

これだけは他社に譲れないと、壮太がねじり鉢巻きで幾夜も積算に取り組んだ入札が、ふたを開けてみると藤野組が総工費一万九千五百円、二番札の桑原土建が二万一千二百円、五色台組は三番札で、二万三千四百五十円の応札だから、一番札とは二割近い開きがある。

藤野組はむかし、棟梁の杉山弥兵衛やへえが弟子入りしていた藤野親方が実権を握り、若い息子を表に立てて営業している、建築の老舗でもあつた。

まさに完敗というほかなかつた。

「壮太、それにしても、藤野組がああ価格で出来て、うちに出来んというはずはあるまい。やっぱり壮太の見積もりが甘かつたんや」

千代ちよは専門知識がないだけに、いつまでも首をひねっている壮太を、結果だけで責めたてた。

「なんぼお母はんがいうても、出来んもんは出来ん。それが気に入らんのなら、おれは社長をやめる」

とうとう壮太が本気で怒りだした。

「まあまあ、いまさら親子喧嘩してもはじまらん。それにしても藤野組は、あれで採算が取れるのかいな」

棟梁の取りなしで、険悪な空気は一応収まったものの、重苦しい空気はどうしようもない。

「しようがない。悔しいが藤野組に頭を下げて、下請工事でもまわしてもらわんと、うちも職人を養のうていけん」

壮太がとんと机をたたいて、吐き出すように言った。

「壮太、止めなされ、それだけはあきません。むかし藤野親方のところを飛び出した、弥兵衛の身にもなってみなされ。それにあれほど安く落札した工事や。下手に下請けしても、まともを支払いしてくれるかどうか、怪しいものや」

「お母はん、判断はわしがする。お母はんは金策だけやってくれたらええ」

壮太も遠慮せず、千代にびしやりと言り返す。

壮太が文恵と結婚して千代と一つ屋根の下で暮らすようになってから、この程度のいさかいは常であった。お互い言うだけ言うと、あくる日はけろりとしていた。

千代はふと、壮太にこれほど遠慮なくものを言える自分が、おかしくなることがあった。娘の文恵に対しては、いまだに他人のような遠慮がありながら、壮太に対してはそれがなかった。血のつながりとは、一体何だろうと考えさせられることが多い。多かった。

それから二か月ばかりたったある日、棟梁の弥兵衛が、耳寄りな情報をかかえて事務所にかえ戻ってきた。

「社長、藤野組が学校の請負工事を投げだした。やっぱり社長の見積もりが正しかったのや」

息を切らせて弥兵衛が話すところは、概略でこうであった。

藤野組が柱や梁の切り組みをはじめて間もなく、県の材料検査があった。そのとき仕入れていた木材のほとんどに多くの節（ふし）があり、規格外の二級品と認定された。

直ちに設計どおり一級品と取り替えるよう指示されたが、藤野組の親方はこれを承知しなかった。

「設計書に、柱と梁は上等の小節（こぶし）と指定してある。ご覧のように、ここにある材木はすべてへ一等小節（こぶし）と大きく印刷してある。節が多いというお叱りだが、それは見解の相違だ」

しかし、藤野組の弁明は通らなかった。木材の等級印刷は、すべて製材所の責任で行うものである。したがって同じへ一等小節でも、製材所が違えば、品質に差があるのが業界の常識である。

なかには二級品に（へ一等小節）の印刷をして、平気で木材市

場に出荷する製材所もある。ただ、すべてに製材所の名前が印刷されているので、信用のある老舗の製材所の製品は高価で取り引きされる仕組みになっている。

藤野組は県の検査を見くびって、最初から二級品を買いたたくつもりで、格安で工事を請け負ったのであった。

県の検査官は意外に強硬であった。というより、木材業界の常識を逆手にとった藤野組の開き直りが、係官を激怒させる結果になってしまったという。

かといって、ここで規定通りの木材に取り換えると、工事の採算割れが目に見えている。万策尽きた藤野組が、請負契約の破棄を申し出たという。

「せめてうちが二番札やったら、あと釜で受注できるのやが、三番札では望みは無いわなあ」

社長を壮太に譲ってからというもの、なにかに愚痴っぽくなった千代が、未練がましくつぶやいた。

「いや、かりに二番札の桑原組が受注したとしても、あれだけ厳しく検査をやられると、儲けが吹き飛んでしまうはずや。俺の積算が正しかったということや」

弥兵衛の顔を見ながら、自信たっぷりの壮太の顔がほころびた。

壮太の推測は正しかった。五色台組が県から呼び出しを受けたのは、それから四、五日あとである。

県の説明によると、二番札で応札した桑原土建と随意契約を交渉したところ、これにも辞退されたという。

五色台組は即日、県と請負契約をかわし、壮太は胸を張って帰ってきた。

「お母はん、やっぱり俺の見積もりが正しかったんや。それより俺の眼鏡に狂いがなかったのが、なにより嬉しいわい」

千代は壮太の自信にあふれた顔を見るのが、我がことのように嬉しかった。

「壮太、ようやった。お母はんは工事のことには、もう二度と口をはさみまへん。帳簿も、だんだんと文恵に引き継ごうと思うとるから、お前からも文恵に言うときなされ」

昭和二年の秋、世は不況のどん底にあるというのに、五色台組は活気に満ち溢れていた。棟梁の弥兵衛はむろんのこと、社長も壮太も身体が二つあっても足りない程であった。

毎日二十人に余る大工、左官、土工、人夫に仕事の段取りは、すべて弥兵衛が取り仕切った。頭立った大工や左官には部分請負で責任を持たせたため、朝早くから夕方おそくまで、仕事場

には活気があった。

社長の壯太は、木材をはじめ材料の仕入れを一気に引き受け、雨の日とてゆっくり休むひまもなかった。

千代は小さな身体でくるくると、こまねずみのように働いた。事務はいつも文恵に指示し、朝のうちに片付けた。とくに文恵には、帳簿はむろんのこと、銀行取り引きの要領、頼母子講（たのもしこう）と呼ばれる無尽講の金の落とし方など、資金繰りの内幕まで厳しく教えた。

そして昼間は工事現場のお茶焚きや、職人たちの三時のお八つの支度など、なりふり構わず雑役に奔走した。

とくに火の用心には気をつかった。夕方ともなれば、職人の最後の一人が現場を去るのを待って、焚火やたばこの火の始末を見て回った。

かなな屑や木屑など燃えやすいものは、すべて丁寧にかき集めて、その日のうちに南京袋に詰めて猫車で何杯も家まで運んだ。

千代が紺の前垂れと姐さんかぶりを取って、茶の間に姿を見せるのは、いつも壯太がひと風呂浴びたあと、熱燗の銚子を傾けはじめるころであった。

「お母はん、会長がそこまでせんでもええ。女子衆を一人雇

うたら済むことや。あんまり無理せんとき」

千代の過労を心配する壯太に、

「人間おごつたらあかん。丈夫で働けるあいだは、デウス様に感謝して働くことや」

千代は、あの若いころ悲しさを紛らわせるために、遮二無二かぶりついていった厳しい畑仕事の思い出が、つい昨日のように思えてならなかった。

秋に請け負った小学校の工事は順調に進み、翌年の三月には無事棟上げが行われた。

棟上げに続いて屋根仕舞がおわると壁塗り、床張り、天井工事など、目に見えて外観が整ってくる。ただこの頃になって、やっかいな問題がおきてきた。雨風が防げるようになって、どこからともなく浮浪者がやってきて、建築中の校舎に寝泊まりするのである。

見つけ次第追い払うのだが、しばらくするとまた別の浮浪者がやってくる。

寝泊まりだけなら別段問題はないのだが、彼らは夜になって気がなくなると、焚火をしたり炊事をしたりする。翌朝焚火のあとを見つけて、ひやりとすることも多い。

「お母はん、これは危ない。当分のあいだ俺が現場に寝泊まりして、監視することにきめた」

夕食を食べながら、にがり切った顔で壮太が吐き出すように言った。

「壮太、それならお母はんに任しとき。私が寝泊まりするが、一部屋だけうまく風囲いをしておくれ」

「それはいかん。おなごでは浮浪者に見くびられる」

「心配ない。姿をみかけたら、すぐ前の交番にかけつけたらええのや」

二人のかばい合うやりとりを聞きながら、ふと文恵はなにか妬ましい思いを覚えた。いつもずけずけ言い合っている二人だが、会話のどこかに、ひそかな愛情と思いやりが交錯しているように思われた。

(12)

千代が建築現場に寝泊まりをはじめて、二十日ほどたった。

その晩、千代はわびしい夢をみた。それは吹きさらしの海岸を、小さな文恵が一人で歩いて遠ざかっていく夢であった。

千代が大声で文恵を呼び止めるが、ちらと振り返るだけで、

だまって遠ざかって行く。この寒い海辺を歩かせては風邪をかせる、追いかけてやうとするが千代の足が金縛りにあつて動かない。

千代は寒さに震えながら、文恵を呼んだ。

「文恵、ふーみーえー……」

大声で叫んだところで目がさめた。

千代の仮泊りの校舎の板囲いが一枚はずれて、夜明け前の冷たい風が吹き込んでいた。

その明け方、千代は激しい悪寒を覚え、明けやらぬ夜道を震えながら家に急いだ。

どうせ風邪だろうと見くびって、熱い梅干し茶を飲んでしのごうとしたのがいけなかった。

その日から二、三日ひどい高熱が続いた。一向に下がらない熱、あわてて医者を呼ぶと肺炎とのことで、それも手遅れ気味だと首をかしげられた。

文恵と壮太が交替で、昼夜の別なく氷で頭を冷やし続けるが、千代の意識がわずかに戻るのは、明け方のいつ時だけである。

ふと千代は、激しいのどの乾きを覚えて目を覚ました。ほの暗いランプの明かりが、千代のそばで仮眠している壮太の姿を

浮かばせている。もう夜明けが近いのか、窓にかすかな明かりが射しはじめた。

千代は壮太が目を覚まさないように、枕もとの吸い飲みをそろりと引き寄せて、水を一口飲んだ。

自分でも不思議なくらい意識がはっきりしていた。壁ぎわには千代のコスモスの花だんすが、ほんのりと浮かんでいる。

「ほんに、人の一生はお芝居の舞台や」

なにげなく千代は、口に出してつぶやいた。

へ幕が開いている間、私は一生懸命に舞台を務めてきた。あの筋書きは、いったい誰が書いたのだろう。デウス様だろうか。はじめにちよっぴり書いて、それを私がどう演じるかを見きわめて、またデウス様は次の筋書きを作るのに違いない。もしかしたら私の花だんすは、デウス様が無傷のまま舞台に残して置きたかったのかもしれない

そういえば母の紀和のたんすには、あちこちに傷がついていた。なかには千代に覚えのある傷もあった。

あれは、千代が小学校にあがる前の年である。兄の清太郎が宝物のように大事にしていた蠟石（ろうせき）をねだって、小さなかけらを貰ったことがあった。

嬉しくなった千代は、さっそく母のたんすに朝顔の花を描い

て遊んだ。清太郎がびっくりして、

「お母はんに叱られるぞ」

という千代は、

「大丈夫や、あとで消したらええ」

と、なおもあちこちに絵を描いた。

あとで千代が着物の袖でこすってみたが、絵はなかなか消えなかった。あわてて今度はつばをつけて、何度もこすると少し薄くなるが、つばが乾くとやっぱり傷は残っている。

むろんその晩、千代は母に大目玉をくった。でもあとで、「あれは子育ての勲章や」と笑いながら父に話していたのを覚えている。

へもうすぐ、お芝居の幕が下りるというのに、私の花だんすは勲章がないままや。せめて文恵の花だんすだけは、ぎょうさん勲章で飾ってもらいたいもんや

そこまで考えると、千代はまた意識に深い霧がかかるのを覚えた。

次の日の夜は、壮太に代わって文恵が看病に当たっていた。その明け方、看病に疲れた文恵がうとうとしていると、遠くで子守歌を聞いたような気がした。

ねんねん　ころりよ　おころりよ

ぼうやはよい子だ　ねんねしな

頼りないくらい透き通った声であった。ふと見ると、千代がうつろな目をひらき片手をふとんの外に出して、そばに寝ている子供をあやすような手振りを繰り返している。

「これ、おとなしく寝ないと、お母はん帰りますよ」

はつきりした声であった。

突然、文恵のなかで遠い日の避病院の思い出がよみがえった。

それはまぎれもなく、なつかしい「お母はん」の声であった。

文恵の心のひだに深く深く沈んでいた「お母はん」の甘いさきやきであった。

あこのころの文恵は、この声を聞くと眠くもない両目を一生懸命に閉じて、片手をそっと母のふところに入れ、おとなしく寝たふりをしながら子守歌をうっとりとして聞いていた。

さとのみやげに　なにもろた

でんでんたいこに……

千代の声はだんだん小さくかすれながらも、目だけはうつろに開いていた。

「お母はん……お母はんは、また、うち一人を残して行くつもりやろ。まだ、幕を引いたらあかん。お母はんに放っておか

れるのはもういやや。……うち……」

文恵は、だだっ子のように泣き叫びながら、千代の乳房をつかんでいた。物心ついてから文恵が母にみせた、最初の涙であった。

痛いほどつかまれた乳房の感触に、千代は「いのちの流れ」の確かさを覚えながら、かすかに微笑んだ。

東の窓から射しこんだ朝の光が、傷一つ無い千代の花だんすを包み、散りばめられた螺鈿のコスモスが鈍く虹色に輝いていた。

おわり